

# I

---

明治維新と武士

# I 明治維新と武士

## 要点

薩摩藩は、明治維新において重要な役割を果たした。それは、「倒幕」が目的であったのではなく、世界の潮流を踏まえ、「新たな国家を建設」しようとするものであった。

薩摩藩がそうした役割を果たし得た要因としては、次のようなものが挙げられる。

- 薩摩藩の武士たちは、藩校 造士館や郷中教育<sup>ごじゅう</sup>において、朱子学やその影響を受けた武士道、知行合一を唱える陽明学を学ぶとともに、近衛家を通じて築いてきた朝廷との長年の関係を基盤に、国学や歴史学を学んでおり、新たな時代の国家像に向けて自ら行動していく志や、公のために身を捧げるといった倫理・道徳規範を有していた。そのことが、紆余曲折を経ながらも、明治維新という大きな社会変革を可能にした。
- 薩摩藩は、琉球を通じて、経済的な利益を得るのみならず、藩独自に海外の情報を得ることが可能であり、西洋列強の動きなど膨大な情報を収集・分析していた。また、琉球への度重なる西洋列強の来航は、領土への危機でもあり、日本の独立を守るためには、攘夷ではなく、国が一つにまとまり近代化を図っていく必要があることをいち早く認識し、朝廷・幕府・諸藩の合意形成に配慮しながら行動した。
- 世界への広い視野と洞察力を持っていた第11代藩主 島津斉彬は、西洋列強の国家体制や技術力等を踏まえて、我が国も近代化を図っていく必要があることを明示し、そのための事業（集成館事業）を行った。また、その後薩摩藩の実質的な指導者となった島津久光は、小松帯刀や岩下方平<sup>みちひら</sup>といった上級武士と、下級武士で誠忠組の西郷隆盛、大久保利通らを登用して藩体制を確立し、他藩に見られたような分裂を回避しながら激動期の薩摩藩を率いた。
- 薩摩藩は、調所広郷<sup>ずしよひろさと</sup>による天保の改革で、大坂をはじめとする地域との通商を拡大するとともに、徹底した専売制を実施し、人々の労苦を伴いながらも財政的な危機を乗り越えたこと、また、他藩に比べ圧倒的に武士が多く、有事に対応できる体制を構築できたことが、明治維新において大きな力となって現れた。

## 1 薩摩藩の学問的背景

薩摩藩が明治維新において重要な役割を果たすことができた背景の一つには、学問のレベルが高かったことも挙げられる。武士の子どもは、幼少の頃から郷中教育で武士として身に付けるべき学問や倫理・道徳規範を習得し、優秀な者は藩校 造士館で学び、さらに優秀な者は藩外へ留学する道も開けており、藩士の中には極めて高い学問を身に付けた者も存在した。

江戸時代後期には、儒学に加え国学や蘭学も盛んになり、こうした学問的背景も勤王や近代化といった薩摩藩の方向性に影響を与えた。

### 【儒学】

- 戦国時代、島津忠昌<sup>ただまさ</sup>によって鹿児島に招かれた桂庵玄樹<sup>けいあんげんじゅ</sup>は、薩摩の地で儒学を講じ、中国 南宋の朱子<sup>しゅし</sup>が著した儒学の経典『大学』の注釈である『大学章句』を日本で初めて刊行した。

その学問の系譜は薩南学派と呼ばれ、江戸時代には南浦文之<sup>なんぼぶんし</sup>、泊如竹<sup>とまりじょちく</sup>など著名な学者を輩出し、藤原惺窩<sup>せいか</sup>や林羅山<sup>らざん</sup>など、幕府の中心的な学者にも影響を与えた。

- 江戸時代中期の第8代藩主 島津重豪<sup>しげひで</sup>は、藩内の士風改善を進めるとともに学問を奨励し、藩校 造士館をはじめ、医学院、明時館（天文館）等を設置した。薩摩藩では、この頃から儒学に加え、国学や蘭学も盛んになった。

- 薩摩藩士の精神的な支柱は武士道で、幼い頃から郷中教育<sup>※1</sup>で徹底的に鍛えられた。薩摩藩では、日新公<sup>じっしんこう</sup><sup>※2</sup>のいろは歌に「いにしへの道を聞いても唱へても わが行にせずばかひなし」とあるように、知識そのものよりも実践を重んじる風潮があった。

※1 郷中教育については120ページを参照。

※2 島津家中興の祖とされる伊作島津家の島津忠良（1492-1568）の号。子の貴久が島津本家を継ぎ、その子義久の時代に島津氏は九州制覇を目前にする勢いとなった。



桂庵玄樹(1427-1508)

【鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵】



島津重豪(1745-1833)

【玉里島津家資料・黎明館蔵】

- 藩校 造士館で成績優秀な者については、江戸の昌平黌（幕府の学問所）をはじめ、各地の教育機関で学ぶ道もあった。

造士館の学生を藩外に留学させる制度があり、1か月金1両2分、米4斗5升を与えている。  
『観光集』秋月悌次郎<sup>1</sup>【鹿児島県立図書館蔵】

- 西郷隆盛は、知識と行動の一致(知行合一)を強調する王陽明の儒教の考え方(陽明学)に傾倒していた。<sup>2</sup>

- 西郷隆盛は、大久保利通や有村俊斎（海江田信義）らと、薩摩藩における陽明学の第一人者である伊東祐之から陽明学を学び、佐藤一斎の言行録である『言志四録』<sup>\*</sup>を座右の書としていた。

<sup>\*</sup> 佐藤一斎は、昌平黌の儒官(教官)を務めた人物であり、朱子学が専門だが、その広い見識は陽明学にまで及んだ。特に、『言志四録』は陽明学の視点で記されたもので、西郷隆盛をはじめ、幕末の志士に大きな影響を与えた。

- アヘン戦争により、海外情勢の変化に危機感を持った武士たちは、改めて学問(多くの場合「近思録」<sup>\*</sup>を教本とした)に取り組み始めた。薩摩藩の場合は、主に下級武士たちが志や情熱などを重視する陽明学に傾倒していった。このように、学問を修めて藩政に意見するようになった軽輩の者を邪険に扱わず、見込みのある者は登用した藩が、明治維新をリードする雄藩となった。<sup>3</sup>

<sup>\*</sup> 1176年に朱熹らが編纂した朱子学の入門書で、儒教の実践に重きを置くのが特徴。

## コラム

### 朱子学と陽明学

朱子学は、中国 南宋(1127年～1278年)の朱熹(尊称は朱子)が大成した儒学の一派。その特色は「性即理」として人間の本性の中に真理はあり、学問によって真理は導き出されると考えた点にある。

これに対し陽明学は、朱子学から分かれた儒学の一派で、中国 明(1368年～1644年)の王守仁(号は陽明)が大成した。その特色は「心即理」として人間の心の中に真理はあり、学んだことの実践によって真理は導かれると考えた点にある。陽明学は実践を重んじたことから、革命的な面があり、江戸時代後期に大坂で幕府に対し挙兵した大塩平八郎も陽明学者であった。

1 万延元年(1860年)に薩摩藩を訪れた会津藩士

2 『The Emergence of Meiji Japan』マリウス・ジャンセン(プリンストン大学名誉教授)編

3 猪飼隆明(大阪大学名誉教授)



- 西郷隆盛は水戸藩の藤田東湖<sup>とうこ</sup>との交流が深く、西郷の尊王思想の形成には水戸学が大きく影響した。

なお、西郷は物事を思考したり実際に行動する際、大義名分に重きを置いており、特に外交においては大義名分を最も重視した。

コラム

### 朝鮮との外交問題と西郷隆盛

朝鮮をめぐる西郷隆盛の姿勢については、研究者によって様々な見方があるが、ここでは坂野潤治<sup>ばんの</sup>氏と猪飼隆明<sup>いかい</sup>氏の説を紹介する。

#### 坂野潤治 東京大学名誉教授の説

明治8年(1875年)の江華島事件<sup>\*</sup>をきっかけに、日本政府は開国要求を朝鮮政府に突きつけて江華条約(日朝修好条規)を結んだが、この事件に西郷は強い不満を抱き、腹心の篠原国幹宛の書状で次のように述べている。

「朝鮮の儀は数百年来交際<sup>かいさい</sup>の国にて、御一新以来、其間に葛藤を生じ、既に五、六ヶ年談判に及び、今日其結局に立到り候処、全く交際これなく人事尽し難き国と同様の戦端を開き候義、誠に遺憾千万に御坐候」

明治6年(1873年)の西郷は、「征韓」を唱えたのではなく、朝鮮への使節の派遣を唱えたのであり、江華島事件のようなことを目指したのではなかったのである。

※ 日本海軍の雲揚艦<sup>うんよう</sup>が航路測量を名目として朝鮮の江華島砲台を挑発し、相手が撃ってきたとして一挙に同島を占領した事件。

#### 猪飼隆明 大阪大学名誉教授の説

西郷隆盛の征韓論は、長州の吉田松陰、それを引き継ぐ木戸孝允らの征韓論とは本質を異にするものである。明治政府は、列強に伍して世界に飛び込む時、朝鮮から満州へと海外雄飛することでそれを実現しようとしたが、西郷の言動にはそのような朝鮮を服属させようという思想は見当たらない。

西郷の征韓論は、国内問題処理のための手段としての主張であった。彼が問題にしたのは、政権が大久保利通や岩倉具視ら少数の人々に握られていること、ここにそれから排除されたと認識する人々の批判が無視し得ないものとなったことで、それらを解決するために折から矛盾がわき上がった朝鮮との外交を問題にした。すなわち、西郷は朝鮮への派兵の声が高まっているのに応え、まず朝鮮に使節を派遣し、交渉決裂で自らが殺されることによって、朝鮮に派兵する大義名分を作ろうとしたのである。



西郷隆盛(1827-1877)【黎明館蔵】

## 【国学】

- 江戸時代後期の代表的な国学者の一人である平田篤胤<sup>あつね</sup>は、島津重豪<sup>しげひで</sup>や第9代藩主 島津斉宣<sup>なりのぶ</sup>にしばしば面会しており、薩摩藩士も江戸の平田国学の私塾 気吹舎<sup>いぶきのや</sup>に入門するなど、薩摩藩は平田国学との関係を深めていたことが、平田家当主の日記から分かる。

(天保二年正月)十九日

曇、講説之約束に付、白金へ行く、栄翁老君、今日御用召也、

(二月)二日

曇、南風ふく、高輪白金へ行く、栄翁老君、三位になり玉へる御歡也、

『気吹舎日記』【国立歴史民俗博物館蔵】

### 【大意】

(天保2年, 1831年正月)19日

曇、講義の約束のため、(薩摩藩邸のある)白金へ出かけた。栄翁<sup>えいおう</sup>(島津重豪の号)老君が、今日御用があるとのことでお召しがあった。

(2月)2日

曇、南風が吹く。(薩摩藩邸のある)高輪(重豪が居住)白金(斉宣が居住)へ出かけた。栄翁老君が従三位になられたお祝いであった。

- 第11代藩主 島津斉彬は、蘭学に加えて国学も重視し、国学の教育機関である「国学館」の設置を検討した。実際には国学館設置は実現しなかったが、平田篤胤の弟子であった後醍院真柱<sup>ごだいいん みはしら</sup>を藩校 造士館の助教に登用し、自らもその講義を聴いた。

「後醍院真柱造士館助教辞令」:資料1 (P.133)

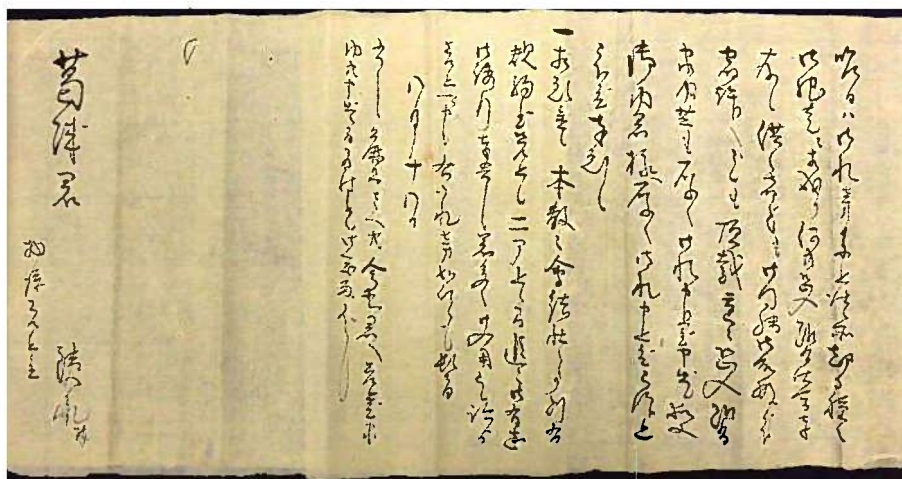
- 尊王思想に結びつく国学は、幕末の政局に大きな影響を与えた。島津久光や大久保利通は平田国学の正式な門下生ではないが、平田篤胤の『古史伝』を読んでおり、その影響を受けていた。<sup>1</sup>
- 薩摩藩では、幕末から明治初年の廃仏毀釈<sup>はいぶつきしゃく</sup>が徹底して行われたが、その背景には国学の影響もある。特に、平田篤胤の思想は神道を中心に考えるもので、神道から仏教を切り離したり、仏教を排斥したりする思想につながりやすかった。薩摩藩では、平田国学を学んだ者を中心として廃仏運動が起こり、同じく平田国学の影響を受けていた久光はこれを承認した。<sup>2</sup>
- 薩摩藩と朝廷や各藩の国学者とを結ぶネットワークにより、学問的な情報のみならず政治的な情報の交換が行われており、国学者のネットワークや情報は、藩の方向性の決定や行動にも影響した。

1 「大久保利通と囲碁の話」(『明治維新の新視角—薩摩からの発信—』佐々木克(京都大学名誉教授)

2 『史談会速記録 第13輯』

- 葛城彦一は、加治木島津家の家臣で天保9年(1838年)に江戸の気吹舎に入門し、平田篤胤の教えを受けた。篤胤の死後は、その養子の鉄胤から教えを受け続けた。また、同じ平田門下の鈴木重胤や、下関の商人で国学を学んでいた白石正一郎<sup>\*</sup>とも交流した。

<sup>\*</sup> 下関に本拠を持つ豪商で、薩摩藩の御用商人として献金をしており、西郷隆盛らも上京の途中に立ち寄っている。文久2年(1862年)の島津久光の率兵上京時にも白石邸が本陣とされるなど、薩摩藩と深い関わりを持った人物であった。



「葛城彦一宛 平田鉄胤書状」【黎明館蔵】

- 薩摩藩では、藩の中樞を担う家老クラスの人物も国学を学んでいた。例えば、薩摩藩英国留学生を引率した町田久成や、パリ万国博覧会の薩摩藩使節として参加した岩下方平などである。
- 国学者の平田家の資料には、薩摩藩士からの書状が大量に含まれており、また、平田家の日記にも、後に家老となる岩下方平がしばしば出入りしていたことが記されていることから、岩下が気吹舎と薩摩藩を結ぶ重要な役割を果たしていたことが分かる。<sup>1</sup>



町田久成(1838-1897)

【個人蔵、薩摩藩英国留学生記念館保管】

薩摩藩は国学が盛んである。郷土や陪臣(藩主直属の家来ではなく、家臣の家来。又家来ともいう。)に至るまで、神代の古事や和歌を学んでいる。

「観光集」秋月悌次郎<sup>2</sup>【鹿児島県立図書館蔵】

秋月悌次郎(1824-1900)

【個人蔵】



1 宮地正人(東京大学名誉教授)  
2 万延元年(1860年)に薩摩藩を訪れた会津藩士

- 京都の薩摩藩邸に勤めた山田清安<sup>きよやす</sup>は、京都の桂園派<sup>けいえん</sup>（和歌の流派の一つ）の香川景樹<sup>かげき</sup>に入門するとともに、本居宣長<sup>もとおりりなが</sup>の学派の国学者 伴信友<sup>ばんのぶとも</sup>に考証学を学んだ。山田に続き八田知紀<sup>はった ともり</sup>や税所篤之<sup>さいしょあつゆき</sup>、高崎正風<sup>まさかぜ</sup>らも桂園派に学び、八田の下では税所敦子<sup>あつこ</sup>や黒田清綱<sup>あつこ</sup>らも学んだ。八田は明治初期に宮中の歌道御用掛になり、また、高崎は明治21年（1888年）に宮中の御歌所の初代所長になり、薩摩の和歌が宮中の主流になった。<sup>1</sup>

コラム

薩摩藩の国学の系譜

桂園派のほかに、薩摩藩で国学者 本居宣長の影響を受けた人物としては、『成形図説』の編纂にも携わった白尾国柱<sup>しろお くにはしら</sup>や、文化朋党事件（近思録崩れ。藩政改革をめぐり藩主 島津斉宣<sup>なるのぶ</sup>が前藩主 島津重豪<sup>しげひで</sup>と対立し、隠居させられた事件）で処罰された大河平隆棟<sup>お ことらたかむね</sup>がいる。また、平田篤胤<sup>あつたね</sup>の門下としては、葛城彦一<sup>かつらぎ</sup>や大河平隆棟の子である後醍院真柱<sup>ごだいいん みはしら</sup>が、篤胤の養子である鉄胤<sup>かねたね</sup>の弟子としては、税所篤<sup>あつし</sup>や岩下方平<sup>みちひら</sup>がいる。

なお、気吹舎の「金銀入覚帳」に登場する、安政3年以降の薩摩藩関係者は、右の人数（延べ数）である。

和暦	西暦	人数
安政3	1856	15
安政4	1857	12
安政5	1858	10
安政6	1859	5
万延元	1860	4
文久元	1861	22
文久2	1862	43
文久3	1863	5
元治元	1864	3
慶応元	1865	11
慶応2	1866	13
慶応3	1867	4

表は宮地正人編『平田国学の再検討（三）』（国立歴史民俗博物館）を基に作成

1 『御歌所と国学者』宮本誉士（國學院大學助教）



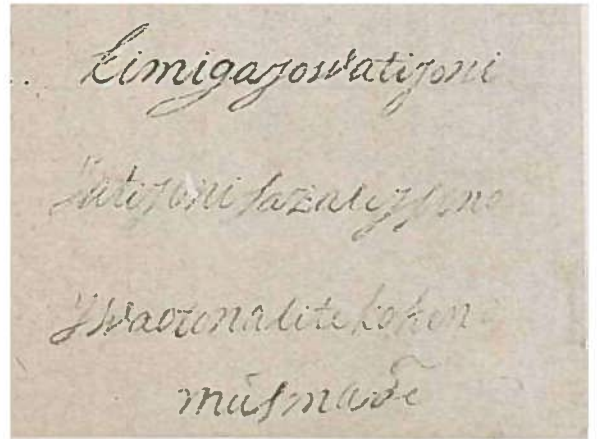
## 【蘭学】

◎ 島津重豪は、西洋の文物に強い興味を示し、チチング、ズーフ、ブロムホフといった歴代のオランダ商館長や蘭通詞（オランダ語の通訳）とも交流が深く、西洋の情報や文物を積極的に収集した。明和8年（1771年）には、江戸から帰国する途中で長崎に立ち寄り、23日間の滞在期間中、幕府から特別許可を得て出島を訪れ、入港していたオランダ船「ブルグ号」に乗船して船内を見学している。<sup>1</sup>

◎ 島津重豪は、文政9年（1826年）、オランダ商館付医師のシーボルトが江戸に参府した際、幼き曾孫 斉彬を伴って面会し、獣や鳥の剥製の保存法などについて尋ねた。その際、オランダ語の単語を一部交えながら会話をしたことを、後年シーボルトが書き残している。重豪の蘭癖とも言われたほど積極的に西洋の知識を学ぶ姿勢は、斉彬に受け継がれていった。<sup>2</sup>

◎ 島津重豪は、江戸高輪の藩邸内に土蔵を造り、自ら収集した多数の海外渡来の「奇物異産」を収蔵し、聚珍寶庫と名付けた。聚珍寶庫の由来を記した「聚珍寶庫碑」によれば、重豪の収集は「真を識らん」（世界の真理を究める）としてのものであったという。<sup>3</sup> 聚珍寶庫は、我が国の博物館の先駆けとも言うべきものであった。

◎ 江戸時代における外国知識の発達については、多くの学者の尽力の結果であるとともに、島津重豪のような蘭学に理解のある庇護者が存在したことが大きい。<sup>4</sup>



「島津重豪筆ローマ字(君が代)」【尚古集成館蔵】



聚珍寶庫碑(黎明館前庭)

1・2 『島津重豪』芳即正(鹿児島純心女子短期大学名誉教授)  
3 「聚珍寶庫碑について」(『黎明館調査研究報告 第13集』)吉満庄司  
4 「重豪公とシーボルト」(『南国史叢 第1輯』)大久保利謙(立教大学教授)

- 島津重豪しげひでの開化政策の一つには出版があり、その中で目立つのは蘭学、博物学系統の出版物である。例えば「円球万国地海全図」は、加世田郷かせだ（現在の南さつま市加世田）の唐通事とうつうじ（中国語の通訳）石塚崔高さいこうに作成させた当時の国内最大級の世界地図である。また、日本の植物の写生図を琉球を通じて中国に送り効能等を問い合わせた『質問本草ほんぞう』は、琉球を間接統治していた薩摩藩ならではの編纂物であった。

これらの成果を基に、語学や博物学に通じていた侍医の曾槃そはんらに編纂させたものが、現在は農業をはじめとする百科事典と位置付けられる『成形図説』30巻である。実は重豪が目指したものは、鳥獣や昆虫を含む全100巻に及ぶ、この世の動植物を網羅する百科図譜であった。<sup>1</sup>

『成形図説』：資料2 (P.134)

- 島津重豪は、長崎の蘭通詞 堀愛生あいせいを登用したり、また、文政9年(1826年)に医師の松木宗保(雲徳)を長崎に派遣し、シーボルトに弟子入りさせたりした。宗保の養子になったのが松木弘安こうあん(後の寺島宗則)で、薩摩藩の科学者として集成館事業でも活躍した。
- 島津斉彬は、藩主になる前から多くの蘭学者と親交を深め、蘭書の翻訳や研究を依頼しており、その人脈や成果が集成館事業で活用された。

#### <島津斉彬の蘭学者ネットワーク>

- ・ 宇田川榕庵うだがわ ようあん…………… 蘭書で育児院を調査し、翻訳した蘭学者
- ・ 戸塚静海とつか せいかい…………… 薩摩藩医を務めた蘭方医
- ・ 坪井信道つばい しんどう…………… 戸塚の後を受けた島津斉彬の侍医
- ・ 坪井芳洲つばい ほうしゅう…………… 島津斉彬の最期を看取った侍医
- ・ 伊東玄朴いとう げんぼく…………… 種痘の痘苗を薩摩藩邸にもたらした医師
- ・ 高野長英たかの ちやうえい…………… 多くの軍事関係の蘭書を翻訳した蘭学者
- ・ 箕作阮甫みつくり げんぽ…………… 蒸気船の製造法の蘭書を翻訳した蘭学者
- ・ 川本幸民かわもと こうみん…………… 兵学・物理・化学・写真等に優れた蘭学者

『島津斉彬の挑戦』(尚古集成館)を基に作成

1 「島津重豪の『成形図説』出版事業」(『島津重豪—薩摩を変えた博物大名—』)丹羽謙治(鹿児島大学教授)

- 島津斉彬は蘭通詞養成を目的とする「蘭学講会所」の設立を計画していたが、急死により実現しなかった。洋学教育施設が現実となるのは、薩英戦争後の元治元年(1864年)に創設された「開成所」である。開成所では、当初蘭学が中心であったが、次第に英学<sup>\*</sup>へ転換していった。

<sup>\*</sup> 英語及び英語圏の学術・技術に関する学問

- 上野景範<sup>かげのり</sup>は、薩摩藩の唐通事であったが、後に蘭通詞養成のため長崎に派遣された。そこで洋学の第一人者である何礼之<sup>がれいし</sup>に出会い、その門下生となり英学を学んだ。その後、鹿児島に開成所が設置されると、句読師<sup>ありのり</sup>(教師)となり、森有礼らに英語を教えた。

また、奄美大島の白糖工場建設に当たっては、招へいしたイギリス人技師のトーマス・ウォートルスの英通詞(英語の通訳)として同行した。

上野は、薩摩における英学の先駆者であった。<sup>1</sup>



上野景範(1844-1888)【個人蔵】

## 【その他の学問】

- 重野安繹<sup>しげの やすつぐ</sup>は、藩校 造士館から江戸に出て幕府の昌平<sup>しょうへい</sup>黌<sup>こう</sup>で学び、帰国後は造士館史局主任として島津久光の命で「皇朝世鑑」を著した。維新後は、太政官正院修史局、修史館で修史事業に携わり、「大日本編年史」の編纂を行った。その姿勢は、中国 清代の考証学の立場をとる、史料に基づいて歴史を叙述する近代の実証史学であった。明治20年(1887年)に最初の文学博士となり、翌年には帝国大学(現在の東京大学)の教授に就任して国史料を設置し、我が国の歴史学の基礎を築いた。



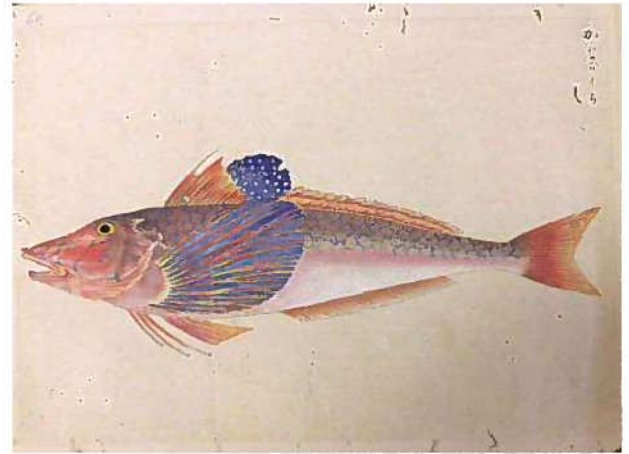
重野安繹(1827-1910)  
【国立国会図書館蔵】

- 中原猶介<sup>なおすけ</sup>は薩摩藩の科学者で、幕領である伊豆の蕪山<sup>にらやま</sup>代官であった江川英龍<sup>ひでたつ</sup>が開いていた塾に、島津斉彬により嘉永6年(1853年)に派遣された記録がある。また、年代は不明であるが、中原のほかにも肥後七左衛門や梅田市蔵という人物も、蒸気機関について学ぶため派遣されている。江川英龍が反射炉を建設し大砲鑄造を行ったように、この塾は軍事技術の研究にも力を入れており、薩摩藩からは黒田清隆や大山巖<sup>いわお</sup>らも派遣され、彼らが学んだ成果は戊辰戦争において発揮された。

1 『幕末維新の洋学』大久保利謙(立教大学教授)



- <sup>きのわきけいしろう</sup>木脇啓四郎は、藩の茶道方として鹿児島城に勤務し、池坊流華道の鹿児島での花頭（師範）になった。天保14年（1843年）には江戸へ派遣され、甲冑製作とともに四条派の絵画を学び、写実的に描く技術を身に付けた。その後、鹿児島に戻り甲冑製作所の主任になった。



『覽海魚譜』【鹿児島県立図書館蔵】

維新後は指宿郷（現在の指宿市）などの地方官を務め、また、明治政府の博覧会御用掛として産物調査に当たった。木脇と二木直喜が描き、明治16年（1883年）の第1回水産博覧会に鹿児島県が出品した『<sup>げいかいぎょふ</sup>覽海魚譜』は、その写実力の高さが評価されている。木脇は、薩摩藩の文化官僚というべき人物であった。<sup>1</sup>

- <sup>そおそのやま</sup>曾於郡襲山郷（現在の霧島市の一部）の郷土 <sup>やへい</sup>竹下弥平は、自由民権運動が起こった初期の明治8年（1875年）に、西洋の民主主義の思想を取り入れた憲法草案を「<sup>ちやうや</sup>朝野新聞」<sup>2</sup>に投稿している。郷土の中にもこのような知識を持った者が存在した。

「明治8年3月4日付朝野新聞」：資料3（P.135）

<竹下弥平の憲法草案の要旨(条文のみ)>

- 一条 戊辰戦争による国内統一から七年、今こそ政府が政治上の過ちを認め面目を一新すべき。帝国の福祉を一層発展させるためには、憲法をきちんと定めるべき。
- 二条 憲法を定めるのは聖誓（五カ条の誓文）を拡充させるためであり、立法権をすべて新たに設立する左院、右院の両院からなる議院に委任する。
- 三条 左院の議員定員は百人。定数の三分の一は政府各省の官僚で職務に通じ才能のある者、三分の一は著名な人望家や福沢諭吉、福地源一郎らのジャーナリスト、三分の一は地方の事情に明るい者で、いずれも選挙で選ぶべき。
- 四条 右院の議員は、政府高官と皇族、華族の中から選挙で選ぶ。定員は百人。ただし、司法官、武官は議員になることはできない。
- 五条 行政の最高責任者である太政大臣および左右大臣は、左右両院の選挙で決める。
- 六条 左右院を開閉する特権は天皇にある。
- 七条 国の歳入歳出を定める特権は左右院にある。
- 八条 憲法の制定、改正の特権はすべて左右両院にある。行政官、司法官、武官は、決して立法権を侵すことはできない。これは立国の本旨であり、もっとも尊重すべきことである。

1 『木脇啓四郎描く』（鹿児島大学附属図書館・鹿児島市立美術館合同企画展図録）丹羽謙治（鹿児島大学教授）  
2 明治7年から明治26年まで東京で発行された自由民権派の新聞



## 2 幕府・朝廷との関係

島津家は、戊辰戦争においては徳川家と敵対関係になるが、大名家としては將軍の正室である御台所<sup>みだいどころ</sup>を唯一、それも2人も出すなど、幕末まで徳川家と良好な関係にあった。

また、朝廷とは近衛家を通じて結ばれており、薩摩藩が近衛家を通じて得た朝廷や公家に関する情報は、質・量ともに他藩や幕府のそれを遙かに凌いでいた。幕末期における薩摩藩の活動は、こうした幕府や朝廷との深い関係に裏打ちされたものであった。

### 【幕府との関係】

- ◎ 島津家と徳川家の婚姻は、第8代將軍 徳川吉宗の養女 竹姫が第5代藩主 島津繼豊<sup>つぐとよ</sup>に嫁いだことに始まる。竹姫は、孫の第8代藩主 重豪<sup>しげひで</sup>の正室に一橋徳川家の娘を迎え、更に重豪の娘 茂姫<sup>しげ</sup>を一橋徳川家の豊千代へ嫁がせるように遺言した。後に豊千代は第11代將軍 徳川家斉となり、重豪は將軍の義父となった。この茂姫の婚姻は、一橋家にとっては御手伝普請<sup>おてつだいぶしん</sup>の軽減を引き合いに出しつつ、島津家からの経済的な援助を期待して承知した面もあった。<sup>1</sup>

覚

- 一 普請御手当之事、  
但右入用金二万兩程
- 一 御簾中一代御賄金一ヶ年金三千兩、餅米五百俵宛被進候様致度候事、  
右兩條之御入料は従  
公儀御構無之筋にて、此御方様より可被進儀に候、左様に御座候ハ、已来御手伝等之御防にも可相成候哉、(以下略)

〔旧記雜録 追録卷一三〇〕<sup>2</sup>【東京大学史料編纂所蔵】

【大意】

覚

- 一 (茂姫が興入れした際に建てる新居の)建築工事費用のこと  
但し右(建築工事)に必要な費用が2万兩程
- 一 御簾中(御三家、御三卿の正室。茂姫のこと。)の生涯の生活費として1年に金3000兩、餅米を500俵ずつ献上して欲しいこと  
右の兩條の費用は公儀(幕府)に関係ないことで、あなた様(薩摩藩)から(一橋家へ)進上されるものである。そうすれば、以後の御手伝(幕府から普請等を命じられること)を防ぐことにもなるのではないか。

1 『島津重豪—薩摩を変えた博物大名—』(黎明館企画特別展展示図録)

2 『鹿児島県史料 旧記雜録追録六』に収載(1275-2号文書)

● 薩摩藩は最終的に幕府を倒すことになるが、はじめから反幕府だったわけではない。むしろ、島津家は徳川家とは一番の親戚であり、最も影響力もある藩であった。親戚・姻族関係でそれに近い大名家はいない。薩摩藩があからさまに幕府に反対したのは長州征伐を拒否したときであった。また、討幕を決定したのは、本当に最後の場面であった。<sup>1</sup>

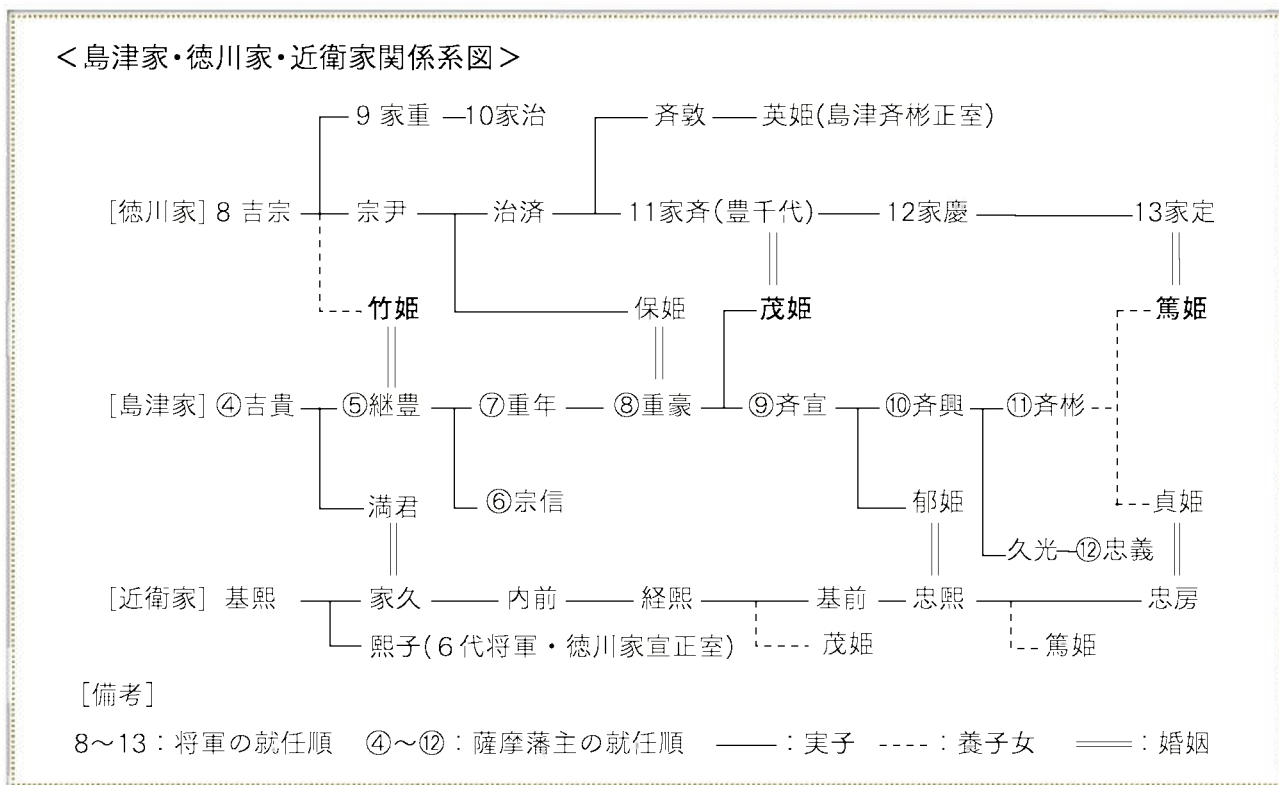
● 第11代藩主になる島津斉彬も一橋徳川家から英姫を正室に迎え、徳川家との婚姻関係は続いた。

斉彬の養女 篤姫が第13代将軍 徳川家定の正室として嫁いだのは、徳川家斉と茂姫の時代の子孫繁栄に倣うことを考えた徳川家から島津家へ申し入れがあったことによる。従来言われてきたような、斉彬が政治的発言力を高めるために篤姫の縁組を進めたのではなかった。<sup>2</sup>



篤姫(1836-1883)【尚古集成館蔵】

● 第13代将軍 徳川家定の正室となった篤姫について、勝海舟は、「天璋院殿の人と為りは、貞婦と云ふか、烈婦と申そふか、実に類稀なる御方なりき。流石は順聖公(斉彬)の御眼識にて御養育ありし丈、非凡の所為在せられ、御性質は堅固にして強毅を兼ね、明断にして慈愛深く在せられたり。」と評した。<sup>3</sup>



1 三谷博(跡見学園女子大学教授, 東京大学名誉教授)

2 「天璋院入奥は本来継嗣問題と無関係」(『日本歴史 551号』)芳即正(鹿児島純心女子短期大学名誉教授)

3 「島津家事蹟調査訪問録 故伯爵勝安房君談話記事」(『史談会速記録 第165輯』)

● 近世当初の島津家の婚姻関係は、家臣との婚姻が多かった。しかし、竹姫が徳川家から島津家に嫁いで以降、第6代藩主 宗信は尾張徳川家の娘と婚約し、重豪も一橋徳川家から保姫を迎えるなど、徳川一門をはじめ大名家と積極的な婚姻関係を結ぶようになった。また、重豪の娘の多くは、老中など幕府の要職に就くことができる譜代大名に嫁いだ。これにより幕閣との間にパイプを作ることができ、婚家から得られる情報も大きかったことが考えられる。このように、近世中期以降における薩摩藩の活動の背景には、婚姻関係が果たした役割もあった。

その一方で、多くの子女が家格の高い譜代大名等と縁組を結んだことにより、実家である島津家から婚家への仕送りは大きな額になり、藩財政悪化の一因にもなった。

<島津重豪の子女と大名等との婚姻及び養子縁組先>

氏名	相手	婚姻及び養子縁組先	家格	石高	備考
茂姫	徳川家斉	徳川将軍家	徳川宗家	400万石	
敬姫	奥平昌男	豊前・中津藩	徳川一門	10万石	婚約後に昌男死去
昌高	奥平昌男	豊前・中津藩(養子)	徳川一門	10万石	昌男の側室娘と婚姻
久昵	有馬誉純	越前・丸岡藩(養子)	譜代	5万石	のち取消
寿姫	松平定和	伊勢・桑名藩	徳川一門	11万石	
長溥	黒田斉清	筑前・福岡藩(養子)	外様	47万石	斉清娘と婚姻
信順	南部信真	陸奥・八戸藩(養子)	外様	2万石	信真娘と婚姻
種姫	戸田氏正	美濃・大垣藩	譜代	5万石	
定姫	柳沢保興	大和・郡山藩	譜代	15万石	
貢姫	戸沢正令	出羽・新庄藩	譜代	6万石	
明姫	島津忠持	日向・佐土原藩	外様	2.7万石	養女(島津忠徴娘)
於並	水野忠実	上総・鶴牧藩	譜代	1.5万石	養女(島津忠厚娘)
於寿	内藤政優	三河・挙母藩	譜代	2万石	養女(脇坂安董娘)

<島津齊宣の子女と大名等との婚姻及び養子縁組先>

氏名	相手	婚姻及び養子縁組先	家格	石高	備考
操姫	本多康禎	近江・膳所藩	譜代	7万石	
祀姫	島津忠徹	日向・佐土原藩	外様	2.7万石	
聡姫	阿部正篤	陸奥・白河藩	譜代	10万石	
閑姫	浜田康寿	石見・浜田藩	譜代	6.5万石	康寿死後、勝姫と改名
勝善	松平定通	伊予・松山藩(養子)	徳川一門	15万石	定通養女と婚姻
寵姫	大久保忠愨	相模・小田原藩	譜代	11万石	

『島津重豪一薩摩を変えた博物大名一』(黎明館企画特別展展示図録)を参考に作成

## 【 朝廷との関係 】

- 薩摩藩と朝廷を結ぶ最も大きなパイプは近衛家であり、薩摩藩が近衛家を通じて得た朝廷・公家に関する情報は、質・量ともに他藩や幕府のそれを遙かに凌駕していた。<sup>1</sup>

近衛忠房から京都の薩摩藩邸にいた大久保利通（当時は大久保一蔵。史料では「市蔵」と記している。）への書状では、朝廷内で次期関白になる可能性のある人物についての評価を伝えている。

（文久二年正月）

（前略）且亦実々前左府ニハ一昨々年御隠栖後何カ御根気薄ク迎モ々々御再勤之御懸念毛頭不被為在義、忠房ニハ其辺深悲歎ニ存候事ナレ共、何分当時之御模様ニテハ御遁世之方安心之場合ト存候事ニ候、且亦自然九条関白辞職之次第ト相成候節ハ、当時一条左大臣至テ柔弱之性質、迎モ当今之職ハ難被勤哉ト被存候、二条右大臣ニハ可然人体と被存候、（中略）何分右之公ニ候ヘハ訖ト関白職可被相勤哉ト愚察候事、（中略）

此二通書取乍乱書市蔵心覚之迄ニ染筆候、決テ他見無用候、入覽後投火々々、頼入置候事、

「近衛忠房書状」<sup>2</sup>【玉里島津家資料・黎明館蔵】

【大意】

（文久2年，1862年正月）

（前略）実は前左大臣（近衛忠熙）は、3年前隠居してからどうも気力が乏しくなり、とても（朝廷に）再び勤めるのではないかという心配は全く無く、（息子である私）忠房にはその辺が深く悲しいのだが、何分現在の様子では引退の方が安心であったと思われる。そうなると九条（尚忠）関白が辞職した時には、現在的一条（忠香）左大臣は至って気弱な性格で、とても現在の（困難な状況の関白）職は務まらないのではないかと思われる。二条（齐敬）右大臣はふさわしい人物と思われる。（中略）（二条）右大臣であればきっと関白職が務まると考える。（中略）

この書き取りは乱筆だが（大久保）市蔵の心覚えまでに書いたものである。決して他人に見せず、読み終わったら焼き捨てるように頼む。

- 島津家の祖先 <sup>これむね</sup>惟宗氏は、平安時代末まで近衛家の <sup>けいし</sup>家司（家に仕える下級貴族）であった。惟宗忠久は、母が源頼朝の乳母であり、また、忠久は頼朝の庶長子であるとの伝承もあり、頼朝との関係が深かった。忠久は頼朝によって、南九州一円に広がっていた島津荘の地頭として文治元年（1185年）に任命されたことから、島津忠久と名乗り島津家初代となった。中世においても島津義久が近衛 <sup>さきひさ</sup>前久から和歌の指導を受けるなど、島津家と近衛家の関係は続いた。

1 佐々木克（京都大学名誉教授）

2 『鹿児島県史料 玉里島津家史料一』に収載（134号文書）



● 江戸時代前期には、第3代藩主 島津綱貴の娘 亀姫、第4代藩主 島津吉貴の娘 満君<sup>みつぎみ</sup>が相次いで近衛家に嫁いでおり、また、島津重豪の娘 茂姫や島津斉彬の娘 篤姫も、近衛家に養女に入ってから徳川將軍家に嫁いだ。

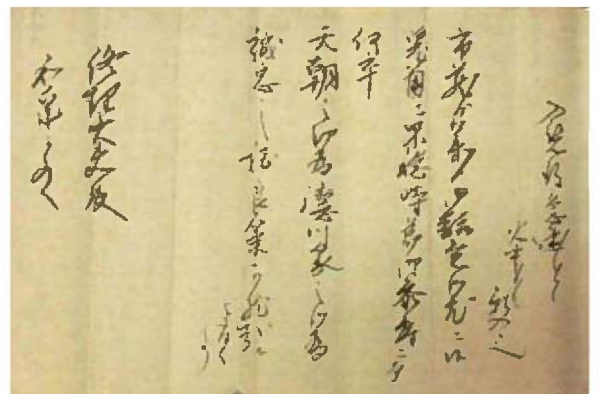
● 葛城彦一<sup>かつらぎ</sup>は、嘉永朋党事件（お由羅騒動<sup>ゆら</sup>\*）の際、脱藩して福岡藩主 黒田長溥<sup>ながひろ</sup>（島津重豪の子で、斉彬の大叔父）に斉彬の擁立を働きかけた国学者である。その後、葛城は島津久光の養女 貞姫の婚姻に随従して近衛家に仕え、朝廷と薩摩藩を結ぶパイプ役となった。

※ 島津久光の母 お由羅が、夫で第10代藩主の斉興<sup>なりおき</sup>に息子の藩主就任を働きかけたとして、斉彬派がお由羅を排斥しようと企て、逆に斉彬派が藩から処罰された事件。

● 黎明館所蔵の「岩下方平関係資料」<sup>みちひら</sup>には、近衛家をはじめとする公家から薩摩藩家老であった岩下方平への書状が多く含まれており、岩下のネットワークの一端が窺える。

● 島津久光の文久2年（1862年）の率兵上京に当たって、公家上層部、とりわけ近衛家の支持を得ることは不可欠な前提条件であった。<sup>1</sup>

近衛忠房から第12代藩主 島津忠義、その父 久光に宛てた書状には、「天朝之御為、徳川之御為、誠忠之程良策可然」とあり、薩摩藩の活動に期待を寄せていたことが分かる。



「近衛忠房書状」【玉里島津家資料・黎明館蔵】

（文久二年正月）

入覽後、急速々々々々火中々々々々頼入候也、  
市蔵より承候御趣意御尤に候、兎角に不穩時節御参府にて、何卒  
天朝之御為、徳川家之御為、誠忠之程良策可然哉に被存候事、  
修理大夫殿  
和泉とのへ

「近衛忠房書状」<sup>2</sup>【玉里島津家資料・黎明館蔵】

【大意】

（文久2年，1862年正月）

読んだ後は、即刻焼き捨てるよう頼む。

（大久保）市蔵から聞いた御趣意はもったもである。とにかく不穩な時の参府であることから、どうか朝廷のため、徳川家のために、誠忠の程（を示すのが）良策ではないか。

修理大夫（島津忠義）殿  
和泉（島津久光）殿へ

1 佐々木克（京都大学名誉教授）

2 『鹿児島県史料 玉里島津家史料一』に収載（136号文書）

● 国学者として薩摩藩と朝廷の関係を最初に結んだ藩士は、京都の薩摩藩邸に勤めていた山田清安<sup>きよやす</sup>であった。山田は桂園派の香川景樹<sup>かげき</sup>から和歌を学ぶとともに、京都の国学者との人脈を築いた。その後、京都藩邸に勤めた八田知紀<sup>ちのり</sup>や高崎正風<sup>まさかぜ</sup>も、桂園派の和歌を学んだ。特に、高崎は京都藩邸留守居附役（京都藩邸責任者の補佐）として近衛家と深い関係を持ち、薩摩藩が会津藩等と協力して長州藩や尊王攘夷派の公家を京都から追放した文久3年（1863年）の八月十八日の政変では中心的な役割を果たした。<sup>1</sup>



高崎正風(1836-1912)

【国立国会図書館蔵】

1 『御歌所と国学者』宮本誉士(國學院大學助教), 『島津久光=幕末政治の焦点』町田明広(神田外語大学専任講師)

### 3 海外情勢の把握

薩摩は日本の西南部に位置し、江戸や京都から遠隔の地にあったが、中国大陸に近く、古くから海外との交易が盛んなところであった。

幕末における西洋列強の中国に対する動きなどの情報を琉球を通じて藩独自に得ており、また、長崎や横浜からも海外情報を入手するルートを持っていた。さらに、薩摩藩英国留学生等から、良質な情報が逐次送られてきており、西洋列強の軍事力・技術力が日本より遙かに優れていることや、西洋列強が日本をどのように見ているのかということをも、正確に把握していた。

こうした海外情報は、藩の方向性を決める際に極めて重要な意味を持った。

- 京都の朝廷情報、江戸の幕府情報に加え、薩摩藩は独自のルートで、琉球（中国からの海外情報）、長崎（オランダ・中国からの海外情報）、横浜（外国人居留地からの海外情報）から、最新で良質な情報を得ていた。
- 薩摩藩は情報の重要性を認識し、情報を政治活動に最大限に活用した点において、際立って特色のある藩だった。<sup>1</sup>
- 薩摩藩が他藩に比べ膨大な情報を収集していたことは、藩の力量そのものが、この時期とりわけ充実していたということの証しである。また、収集した情報の処理・分析を的確に行うことができる人材がいたことも重要である。<sup>2</sup>

#### 【琉球】

- 薩摩は常に海外に目を向けていたことが、ほかの地域と大きく異なる点であった。古くから琉球と関係が深かったことも重要である。<sup>3</sup>
- 慶長14年（1609年）、薩摩藩の琉球出兵の結果、琉球王国は国王<sup>しゅう</sup>尚氏が中国の朝貢国として冊封<sup>さくほう</sup>を受け続ける一方、薩摩藩から間接的な統治を受けることで幕藩体制に組み込まれるという「日中両属」となった。
- 1850年代頃まで、西洋から東アジアに来る船舶の多くは、大陸伝いに西からのルートをとっており、琉球には西洋列強の艦船が度々来航し、通商を迫っていた。  
こうしたことから、薩摩藩は領土への危機感を募らせ、日本の独立を守るためには、攘夷ではなく、国が一つにまとまり近代化を図っていく必要があることをいち早く認識した。

1 佐々木克（京都大学名誉教授）

2 宮地正人（東京大学名誉教授）

3 犬塚孝明（鹿児島純心女子大学名誉教授）





昨日七ツ時分、異国船三艘那覇より西之方五・六里程沖へ相見得、三艘共煙を立火輪船にて那覇之様乗来、日入時分先達て致来着居候重船繫場近辺へ碇を卸候付、今日久米村大夫・通事差遣、本国・来着之次第相尋候処、三艘共亜国之船、二艘は当四月来着為有之大火輪船・中火輪船にて、大火輪船へ其時為参居提督乗居、一艘は七月六日に来着為有之火輪船にて、大火輪船は三百人内唐人八人、中火輪船は三百人唐人三人、七月に來着為有之火輪船は三百五十人乗込、今月十七日広東省之内香湊より一同出帆、直に此所へ來着、猶又如江戸可致渡海段為申由、大夫・通事罷歸首尾申出有之、御仮屋方へも御届申上候、此段致問合候、以上、(中略)

(咸豊三年・嘉永六年)十二月廿四日 久手堅親雲上\*

川平親雲上

「亜人來着ニ付日記」<sup>1</sup>【琉球評定所記録・東京大学法制史資料室蔵】

### 【大意】

昨日七ツ時分(午後4時頃)に、異国船3隻が那覇より西方5~6里ほど沖合に見えた。3隻とも煙を上げた蒸気船で那覇に乗り付けた。日没の頃に前もって到着していたアメリカ船が集まっていたところに碇を下ろしたので、今日久米村の役人と通訳を派遣して本国名と来航の目的を尋ねたところ、3隻ともアメリカの船で、2隻は今年の4月に来た大型蒸気船・中型蒸気船で、大型蒸気船にその時にいた提督が乗っていた。1隻は7月6日に着いた蒸気船で、大型蒸気船には300人、そのうち中国人が8人、中型蒸気船には300人、そのうち中国人が3人いる。7月に来た蒸気船には350人乗り込んで、今月17日に広東省の香港から一斉に出港して、まっすぐここに来たとのこと。なお、また江戸へ渡海すると話していた。久米村の役人と通訳が帰ってきて結果を報告した。このことを(那覇の薩摩藩の)役所にも届けておいた。以上。(中略)

(嘉永6年, 1853年)12月24日 久手堅親雲上<sup>くでけん ベーちん</sup>

川平親雲上<sup>かびら ベーちん</sup>

※ 親雲上とは、琉球王府の中級士族の称号。奉行や地頭を勤めた。

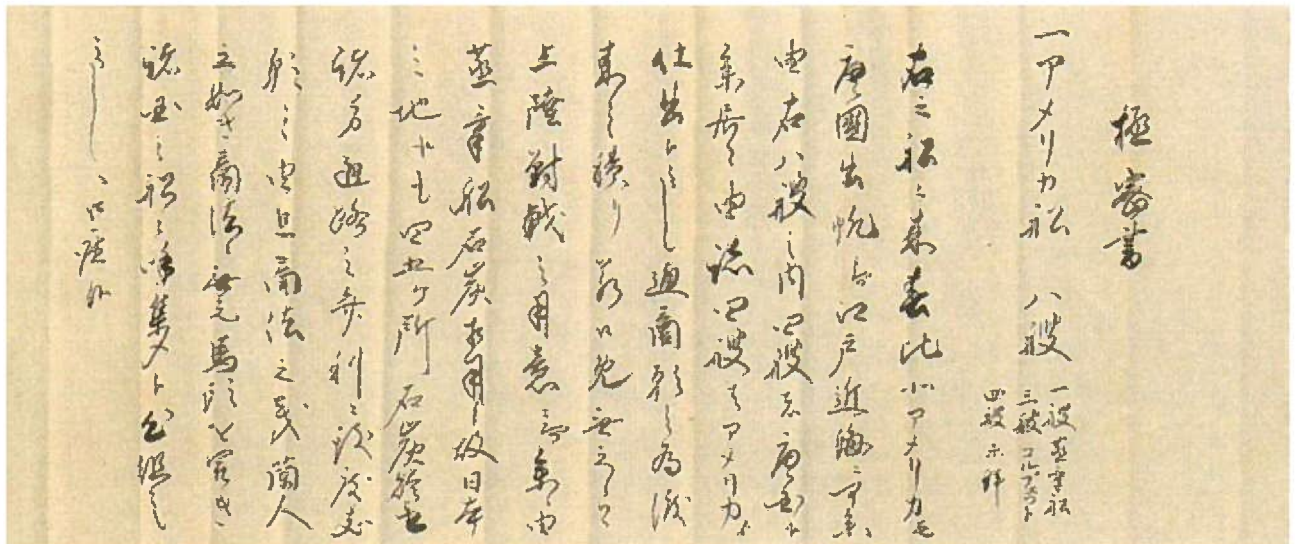
- 琉球へ来航したイギリスやフランスの艦船は、単に交易を求めるだけでなく、ベッテルハイムやフォルカードといった宣教師を通してキリスト教の布教も迫った。薩摩藩は、こうした事件を通じて、仏教や神道的な思想に対するキリスト教といった、精神的な対立軸を考える必要に迫られた。すなわち、その後、日本が西洋列強と付き合いながら重要になる、西洋人の物事の見方や考え方など、内面的なことにも向き合う必要があることを認識させられたのである。<sup>2</sup>

1 『琉球王国評定所文書 第八巻』に収載

2 宮地正人(東京大学名誉教授)

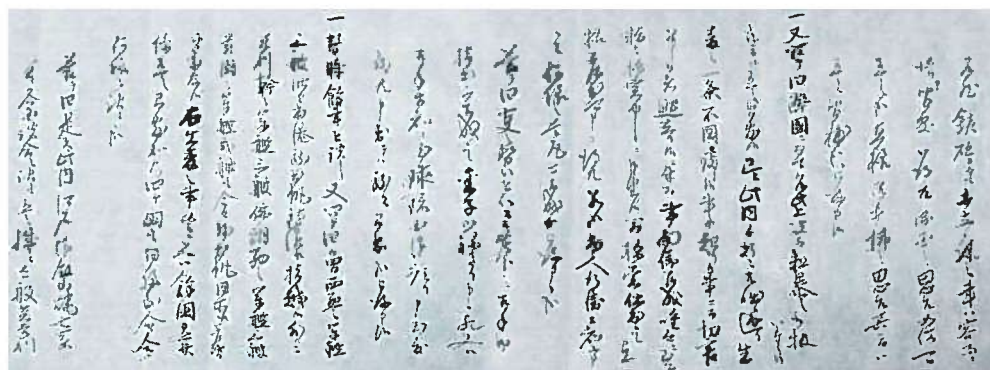
【長崎】

- 薩摩藩は、長崎に藩屋敷を設置し、長崎<sup>ききやく</sup>聞役をはじめとする藩士を駐在させて情報収集を行っていた。幕府の通事(通訳)に日頃から経済的な支援をして関係を構築しており、オランダや中国からの海外情報をスムーズに得ることができた。



「極密書」【島津家文書・東京大学史料編纂所蔵】  
長崎聞役が入手したペリー来航の予告情報を薩摩藩に報告した書状

- 島津斉彬が長崎を通して得た海外情報の一つに、1842年に清で刊行された『海国図志』がある。これは、アヘン戦争でイギリスと対決した清の総督<sup>りんそくじよ</sup> 林則徐の側近であった魏源が著したもので、西洋の進出に対処するため海防の必要性を説いており、西郷隆盛などの薩摩藩士のみならず、国内に大きな影響を与えた。<sup>1</sup>
- 薩摩藩は、生麦事件の後、特に外国人居留地でイギリスの動向に関する情報収集に努めた。例えば、科学者の中原<sup>なかつげ</sup>猶介は、長崎でオランダ人らから聞き取りを行い、「薩摩藩がイギリス人殺害の犯人を差し出さない場合は、賠償金の要求か、琉球が占領される可能性がある」という情報を入手し、藩に報告している。



「文久3年2月7日付 中原猶介書状」【玉里島津家資料・黎明館蔵】

1 『魏源と林則徐－清末開明官僚の行政と思想』大谷敏夫(鹿児島大学名誉教授)

(前略)答テ曰、事之勢ひを以て相考申候に、相手御指出不相成候ハ、金子御ねたり申候歟、又ハ相手相知候迄、琉球国御預り申置度儀共申出テハ致ス間敷哉ト存申候、  
 「中原猶介書状」<sup>1</sup>【玉里島津家資料・黎明館蔵】

### 【大意】

(中原の問いに蘭人レーマンが)答えて言うに、この情勢から考えると犯人を差し出さないならば、金を要求されるか、又は犯人を見つけるまで琉球を占領する旨通告してくるのではないかと思う、と言っている。

### コラム

#### 生麦事件

薩摩藩は、藩内の一部に攘夷派がいたとはいえ、藩の基本的な方針は第11代藩主 島津斉彬以来、富国強兵のために開国し、貿易で国を富ませるとの考え方であった。

生麦事件の数時間前に久光の行列に遭遇したアメリカ人のヴァン・リードは、馬を下りて道の脇に立ち行列を見送っている。この時、薩摩藩からは何ら抗議等を受けていない。生麦事件は、大名行列は避けなくてはならないとの日本の習慣を知らないリチャードソンら騎乗のイギリス人が、そのまま行列とすれ違おうとして行列を乱してしまったため、久光の護衛の薩摩藩士たちによって斬りつけられた、いわば偶発的な事故であった。

なお、薩英戦争前に五代才助(友厚)が長崎で情報収集をしていた時、イギリス商人から「薩摩藩は他藩よりも貿易額が多く、蒸気船も多く持ち、西洋の学問も積極的に取り入れ、頼もしい存在であったのに、今回の事件が起きて非常に困ったことだ」との話があったことを報告している。



「文久3年2月10日付 五代才助問書」【玉里島津家資料・黎明館蔵】

1 『鹿児島県史料 玉里島津家史料二』に記載(479号-3文書)



## 【横浜】

● 幕末期、薩摩藩は西洋諸国等の情報を収集するため、南部弥八郎という人物(出身地・実名ともに不詳、弥八郎は通称、号は柴州)を探索方として雇った。南部は、横浜の居留地で発行されている英字新聞の翻訳を入手し、また、幕府の開成所に入入りし、西洋諸国等の動向をはじめとするあらゆる情報を精力的に収集して、薩摩藩に報告した。

● 南部弥八郎から薩摩藩に提出された報告書は、「玉里島津家史料」に約130冊存在する。これらは、明治維新史研究の重要なテーマの一つである情報ネットワークに関する研究を前進させるための貴重な史料である。<sup>1</sup>



南部弥八郎(1819-1881)  
【黎明館蔵】



「南部弥八郎報告書」  
【玉里島津家資料・黎明館蔵】

「南部弥八郎報告書」:資料4 (P.136)

● 薩英戦争後の講和談判で薩摩藩の代表を務めた<sup>しげの やすつぐ</sup>重野安繹は、国際法<sup>※</sup>も引き合いに出しつつ、イギリスに対して一步も引かずに交渉を行った。

※ 重野がイギリスと談判する際に根拠にした国際法は、アヘン戦争後に中国 清で翻訳され、長崎に輸入された国際法の漢訳洋書であったと考えられる。

日、奪舟ノ事、汝等手ヲイレ奪ヘルユヘ、不法ト見据ヘテ砲発セリ、案内ナク人ノ舟ヲ奪フテ質トスル事世界ノ公論ナリヤ、

日、砲発ノ時其方ヨリ届アリテ砲発セシヤ、

日、此方ニテハ汝等奪取ヲナセシユヘ如右砲発セリ、然レハ兵端ノ起リハ全ク汝等カ手ヲ出シタル事ナリ、

「横浜応接記」【大阪大学懐徳堂文庫蔵】

### 【大意】

(重野) 船を奪ったことは、貴国が手を出して奪ったため不法と見なして発砲したのである。連絡もなく他国の船を奪って質とすることは、国際法上問題がないのか。

(イギリス側) 発砲した時は貴国から通告して発砲したのか。

(重野) 我々は貴国が(薩摩藩の蒸気船を)奪ったので発砲したのである。つまり、戦争の発端は、完全に貴国が(先に)手を出したことにある。

1 宮地正人(東京大学名誉教授)



## 薩英戦争

薩摩に艦隊を派遣したイギリスは、薩摩藩との交渉を有利にするため、薩摩藩が鹿児島湾奥に避難させていた3隻の蒸気船を拿捕した。これを薩摩藩はイギリス側が攻撃を仕掛けたと判断し、砲撃を開始した。イギリス側は、戦争が始まることを想定しておらず、また、暴風雨で軍艦が大きく揺れていたため戦闘準備が遅れ、当初は大きな被害を受けた。しかし、戦闘の準備が整うと、薩摩藩の砲台は次々に破壊され、鹿児島城下も上町<sup>かんまち</sup>を中心に焼失した。この戦いでイギリス側は、集成館事業などで軍事力を強化していた薩摩藩の実力を知り、また、薩摩藩もアームストロング砲など近代工業に裏付けられたイギリスの技術力の高さを痛感した。このように相手を互いに評価したことが、その後の薩摩藩英国留学生の派遣などイギリスとの関係強化につながった。

なお、薩摩藩が薩英戦争後に収集した情報として「薩英戦争ニ関スル清国人ノ聞書」と題する報告書がある（『鹿児島県史料 玉里島津家史料二』）。これは、鐘山という中国人が上海でイギリス人から聞き取ったもので、「薩摩と長州を比べると、薩摩藩は格段に強い。戦争の結果としては勝負がつかなかった」と記されている。



「薩英戦争絵巻」【黎明館蔵】

## 【海外】

- 長崎で学んだ医師の松木弘安(後の寺島宗則)は、その優秀さを買われて幕府に登用され、海外情報を翻訳する蕃書調所に勤めた。松木は、文久2年(1862年)に派遣された幕府の遣欧使節に通訳兼医師として参加し、ヨーロッパ滞在中に収集した様々な情報を薩摩藩へ送った。その中には、フランスがキリスト教を利用して海外に進出していることや、琉球を占領する企てに関する情報などがあった。

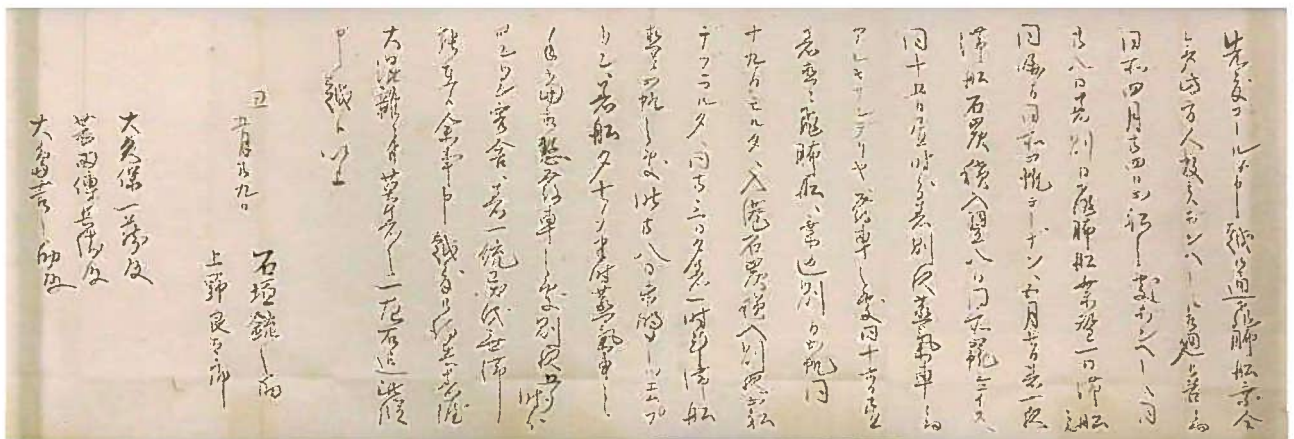
公義御用付、仏蘭斯其外之諸国へ経歴中見聞之次第、且仏蘭斯之教主琉球へ耶蘇教を弘メ、土民に帰服可為致との企も有之、其上近年日本乱妨之輩多起り、終に争端を開事無疑候付、是非他国へ先立て日本を伐之謀相決候付、是より前仏国より琉球へ兵卒式千を渡し、何となく琉球を奪取之望有之との段も、羅尼と申者より弘安承得候趣共、(以下略)

「文久2年11月28日付 松木弘安書状」<sup>1</sup>【玉里島津家資料・黎明館蔵】

### 【大意】

幕府の御用で、フランスその他の諸国歴訪中に見聞したことです。フランスの宣教師が琉球にキリスト教を布教し、住民に信仰させようとする企てがあり、さらに最近日本には乱暴者が多くおり、最後は戦争になることは疑いないので、是非とも他国に先駆けて日本を攻める計画が決まり、以前にはフランスから琉球へ2000人派兵し琉球を占領しようとの企てがあったことも、ロニという者から(私)弘安が聞きました。

- 薩摩藩英国留学生(使節団)の新納久脩や町田久成が現地から国元に送った報告書(西洋諸国の対日姿勢や海外情勢等)は、他藩が持ち得ない最新の情報で、薩摩藩の政策・方針決定に寄与した。



「大久保一蔵(利通)・箕田伝兵衛・大島吉之助(西郷隆盛)宛 新納久脩・町田久成書状」【玉里島津家資料・黎明館蔵】  
使節団の責任者である新納久脩(変名:石垣銳之助)・町田久成(変名:上野良太郎)の薩摩藩への報告書。

1 『鹿児島県史料 玉里島津家史料一』に収載(379号-1文書)

- 慶応3年(1867年)の第2回パリ万国博覧会には、薩摩藩は薩摩太守政府として出展し、幕府とは対等で独立した国家であることをアピールした。それにより、幕府の権威は失墜し、予定していたフランスからの借款計画も白紙に戻された。

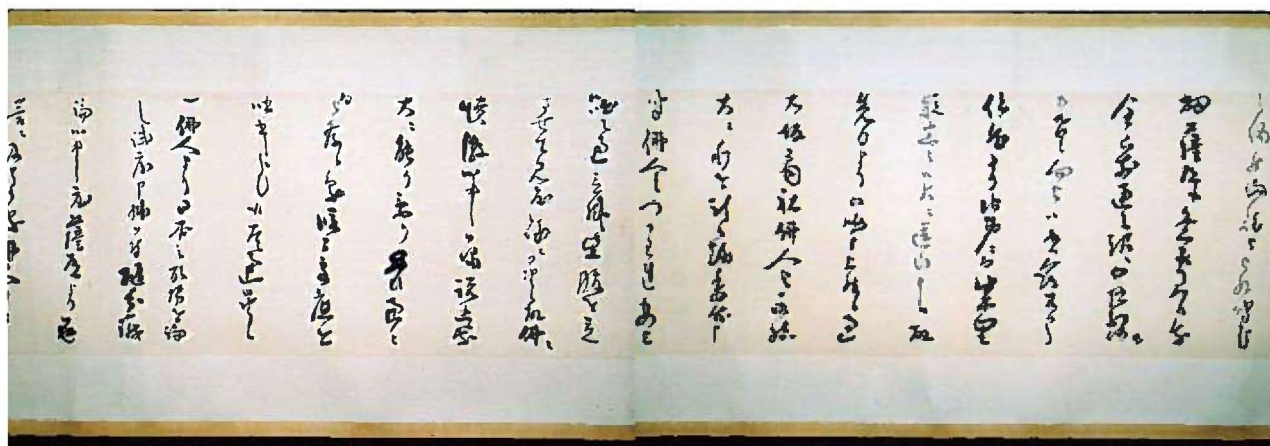
薩摩藩の出展は、慶応元年に派遣された薩摩藩英国留学生(使節団)の新納久脩、五代友厚が、フランスのモンブラン伯爵と計画したもので、幕府に先駆けて万博開催の情報を収集し、そして万博に出展することの意味を認識していた。

薩摩藩の代理人となったモンブラン伯爵は、「薩摩琉球国勲章」の作成やマスコミを使った情報戦術で薩摩藩の存在を大いに宣伝した。情報力、外交力に加え、企画力、演出力についても幕府を凌いでいた。



「薩摩琉球国勲章」【尚古集成館蔵】

- 西郷隆盛は、戊辰戦争が始まる半年前の慶応3年(1867年)7月に、イギリス領事館書記のアーネスト・サトウと会見した際、「もし薩摩藩と幕府が戦争になった場合には、イギリスが薩摩藩の軍事支援をしてもよい」というサトウの申し出を断った。これは、西洋列強がアジアを植民地にする際、軍事支援から始めることが常套手段であるということを、薩摩藩英国留学生から送られてきた情報等で知っていたことに基づく判断であった。



「慶応3年7月27日付 大久保利通宛 西郷隆盛書状」【黎明館蔵】

西郷が大坂でアーネスト・サトウと面会した際の様子を大久保に知らせた書状。



## 4 薩摩藩の組織体制

薩摩藩が明治維新に重要な役割を果たせるような体制を構築できた要因として、まず財政改革、軍制改革を中心とした調所広郷ずしよひろさとによる天保の改革が挙げられる。ここで蓄積された財源等を活用して、第11代藩主 島津斉彬は集成館事業を展開した。その後、藩政を任された島津久光は、「順聖公じゅんせいこう（斉彬）遺志」を前面に出しながら拳藩体制を築き、小松帯刀たてわき、岩下方平みちひらといった上級武士と、大久保利通ら誠忠組のメンバーを登用して、機能的な体制を構築した。

### 【人材登用】

- 世界への広い視野と洞察力を持っていた島津斉彬は、西洋列強の国家体制や技術力等を踏まえて、我が国も近代化を図っていく必要があることを明示し、そのための事業（集成館事業）を行った。

人事の面では、御小姓組おこしやぐみの西郷隆盛を抜擢し、様々な薫陶を行って、藩外にも通用する人材に育てた。

- 薩摩藩が幕末の政局において大きな仕事できたのは、島津久光の統率力によるところが大きい。他藩では、派閥の抗争があったり、藩主の意向に沿わない動きがあったりして藩が一枚岩になれず、藩を挙げて統一した動きが取れないケースが多かった。それに対し、薩摩藩は藩を割ることなく拳藩体制で臨むことができた。<sup>1</sup>

- 誠忠組<sup>\*</sup>の「突出」計画は、その後の具体的な方針や見通しを欠いたもので、勢いにまかせて出ていくようなものであった。これに対して、島津久光は冷静な大局観と状況判断に基づき、誠忠組の要求に対して、説得力をもった論理で対応していた。<sup>2</sup>

<sup>\*</sup> 西郷隆盛、大久保利通を中心とする下級武士の集団。薩摩藩は島津斉彬以来、尊王思想に基づく公武合体を目指しており、幕府が受け入れない場合は天皇の側に立つというのが藩の基本方針であった。斉彬の死後、誠忠組のメンバーは、その時が来たら藩としての決定がない場合でも、自分たちだけでも幕府へ実力を行使（突出）しようとした。



島津斉彬(1809-1858)【尚古集成館蔵】

1 芳即正(鹿児島純心女子短期大学名誉教授)

2 佐々木克(京都大学名誉教授)

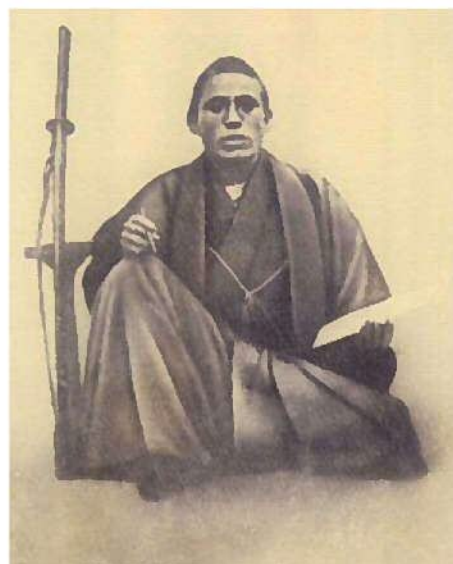


● 島津久光は、「順聖公(斉彬)遺志」を前面に出しながら、拳藩体制を目指した。人事面では、新たに小松帯刀、岩下方平といった上級武士をブレーンに据え、その下に大久保利通ら誠忠組のメンバーも登用した。誠忠組らの主張も取り入れ率兵上京に臨むが、藩の方針に反する行動を取る者は厳しく処罰した(寺田屋事件)。江戸からの帰路に起こった生麦事件とその結果起こった薩英戦争を通して、藩士を掌握し完全に拳藩体制を構築することに成功した。<sup>1</sup>



島津久光(1817-1887)【玉里島津家資料・黎明館蔵】

● 薩摩藩は、生麦事件や薩英戦争を起こしたため、攘夷の代表のように思われがちであるが、前者は偶発的な事件で、後者はイギリスが攻めてきたため武士の名誉をかけて戦ったものであり、攘夷ではない。薩摩藩は、初めから開国論で一貫していたが、公武合体運動の時も外交問題には触れずに、内政に関わることで主張することで、批判を受けることもなかった。<sup>2</sup>



大久保利通(1830-1878)【国立歴史民俗博物館蔵】

● 従来の維新史で不当に低い評価しか与えられてこなかった島津久光であるが、「玉里島津家史料」<sup>※</sup>は幕末維新时期における久光の果たした役割を明らかにし、彼を妥当な歴史的位置に置きなおす上で必須史料となっている。<sup>3</sup>

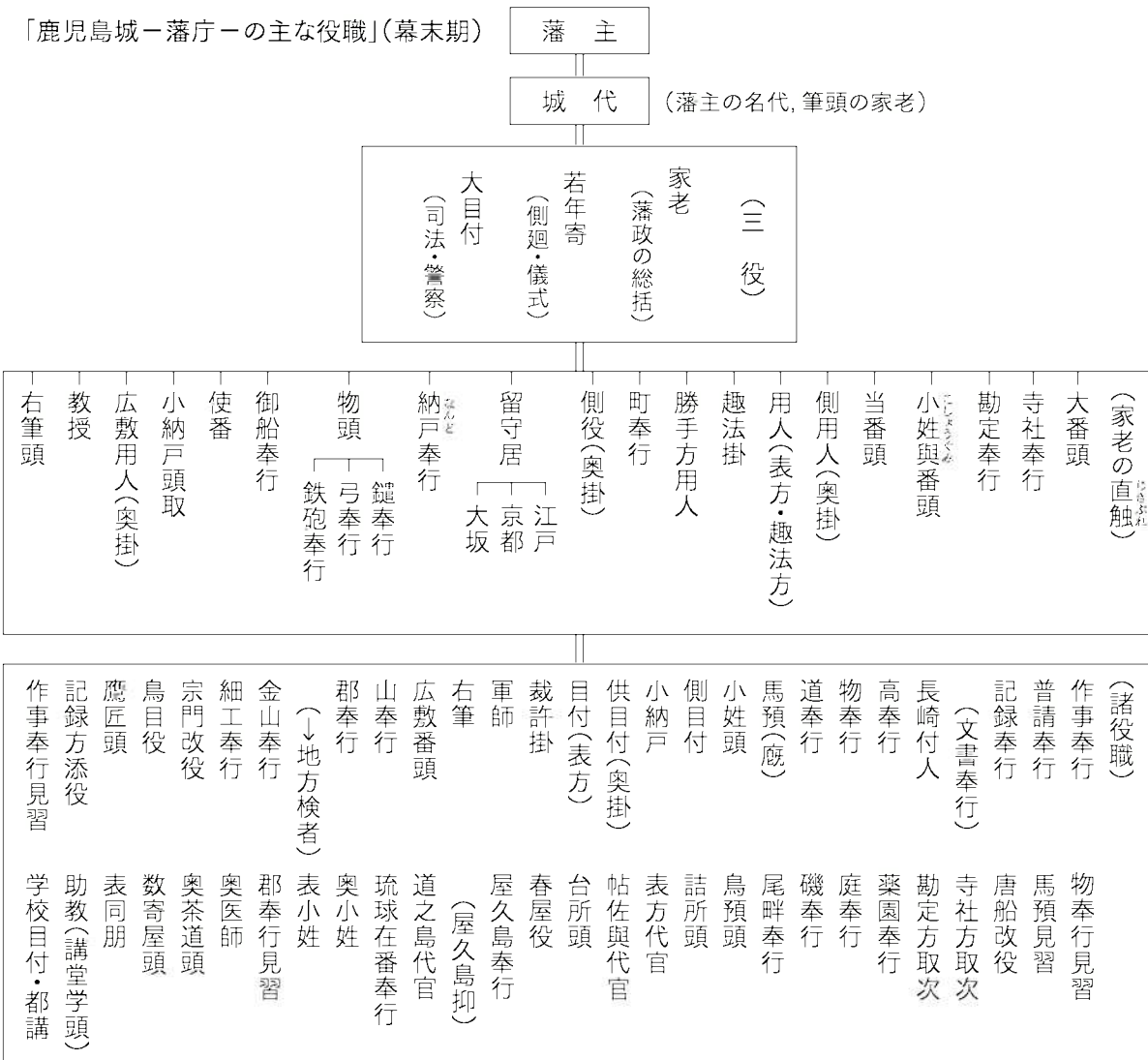
※ 「玉里島津家史料」は、久光の下に集められた情報を中心とする史料群で、平成27年に鹿児島県歴史資料センター黎明館に寄贈。平成3～14年に『鹿児島県史料』として黎明館より刊行(全12巻)。



『鹿児島県史料』(玉里島津家史料, 斉彬公史料, 忠義公史料)

1 『島津久光と明治維新』芳即正(鹿児島純心女子短期大学名誉教授)  
2 三谷博(跡見学園女子大学教授, 東京大学名誉教授)  
3 宮地正人(東京大学名誉教授)

<薩摩藩の主な役職>



参考「県史」「職掌紀原」「薩藩史談集」「薩陽武鑑」など

出典:『薩摩七十七万石』(黎明館企画特別展示図録)

- 薩摩藩の役職は、原則は家格に応じ就任できる職は決まっております、役料等では表のような規定があった。しかし、調所広郷が茶坊主から登用されて家老に上り詰めたように、有能な人物については抜擢が可能な体制でもあった。

<薩摩藩の役職と役料(役職に応じた給与)等>

役名	家老	寺社奉行	側用人	側役	長崎付人	小納戸	大島代官
役料	2000石	180石	140石	90石	75俵	48俵	40石
賄料※	60人	23人	18人	15人	10人	6人	6人

※ 賄料はその数の家来を養う生活費

『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集四』を基に作成

● 薩摩藩では、江戸時代中期に徳田<sup>ようこう</sup>邕興<sup>ごうでんりゅう</sup>が合伝流と呼ばれる火砲第一主義の兵法を始め、伝統的に銃砲を多用することを受容する素地があった。アメリカ船が山川港に接近したモリソン号事件(1837年)をきっかけに、その翌年、調所広郷は藩士の鳥居平七、平八兄弟を長崎で洋式砲術を教えていた高島<sup>しゅうはん</sup>秋帆に入門させ、帰藩後は藩の砲術師範とした。その後、薩英戦争の経験を基に、元治元年(1864年)に藩は洋式砲術に統一した。

● 薩摩は、他藩と異なり、内的な暴動や政治的な転覆は経験しなかった。武士の数は多く、(長州藩の奇兵隊のように)庶民からの補充は不要であった。また、幕府の招集軍隊の場合に障害となったような(鉄砲は足軽の武器であるという)武士階級としてのこだわりもなく、銃砲部隊を組織することができた。

さらに重要なことは、島津久光が政治的コントロールを維持し、西郷隆盛や大久保利通という優秀な人材を用いることができたことである。久光は、寺田屋事件を収め、より西洋について知る必要があることを明確に理解し、1865年には14人の留学生を選抜して、ロンドンに派遣した。<sup>1</sup>

薩摩藩は従来の兵法と西洋流の兵法を折衷し、銃砲中心の兵法を確立した。藩主自らが指導したため、新式兵法を取り入れる際、他藩のような紛議は起きなかった。

武芸の中で西洋銃術は非常に盛んであり、藩内で学ばない者はいない程である。

歩兵隊はゲバール銃を、騎兵隊はピストルを用いる。

【観光集】秋月悌次郎<sup>2</sup>【鹿児島県立図書館蔵】



【島津斉彬公御取立騎兵操練図絵巻】【尚古集成館保管】  
安政5年(1858年)7月8日、天保山での軍事演習の様子を描く。

1 『The Emergence of Meiji Japan』マリュス・ジャンセン(プリンストン大学名誉教授)編

2 万延元年(1860年)に薩摩藩を訪れた会津藩士



◎ 慢性的な財政難に苦しんでいた薩摩藩は、調所<sup>ずしょ ひろさと</sup>広郷による天保の改革において、黒糖などの専売制の実施、菜種の品質向上や骨粉肥料生産などの殖産興業、商品流通の整備等により、人々の多大な労苦を伴いながらも、500万両の負債の整理と50万両の備蓄に成功した。

その財政力を基盤として、島津斉彬の集成館事業など近代化が進められ、新国家建設に向けた準備が整えられていった。



調所広郷(1776-1848)  
【西村貞則氏蔵、黎明館保管】  
名越時敏による似顔絵

コラム

調所広郷による薩摩藩天保の改革

島津重豪<sup>しげひで</sup>から文政11年(1828年)に財政改革主任を命じられた調所は、大坂商人の協力を得つつ、財政改革を遂行した。財政改革の主な柱は以下の4点である。

1 返済の繰り延べ

- ・ 薩摩藩の負債500万両を元本のみ、250年賦で支払う。なお、この支払いは明治4年(1871年)の廃藩置県まで続けられた。

2 専売制の実施

- ・ 奄美の黒糖に専売制を実施した。その際、奄美では貨幣流通が停止され、年貢納入分以外の黒糖についても、藩が持ち込む物資との物々交換により集められた。黒糖は、専売制実施前の1819年～1829年には136万両の利益があったが、専売制後の1830年～1839年には235万両に増加した。この他、樟腦<sup>しょうのう</sup>、寒天<sup>はぜらう</sup>、樺蠟<sup>うこん</sup>、琉球産の鬱金なども専売制が実施された。

3 殖産興業

- ・ 農業生産向上のため骨粉方という役所を置き、農民に骨粉肥料を廉価で販売した。
- ・ 出水郷<sup>いずみ</sup>(現在の出水市)や国分郷(現在の霧島市国分)で新田開発を実施した。
- ・ 薩摩焼の生産を奨励した。

4 商業資本の活用

- ・ 藩に協力する商人に対しては、専売品を優先して扱わせ、利益を上げさせた。
- ・ 改革前は大坂への物資の輸送に藩外の船も使っていたが、藩内の商人に資金を貸し付けて船を建造させ、藩の産物を運搬させることで返済したと見なした。

この他、民生の安定のため、甲突川の浚渫や五石橋の建設、百姓の年貢納入の便を考えた川内川上流に当たる曾木川の開削なども行った。

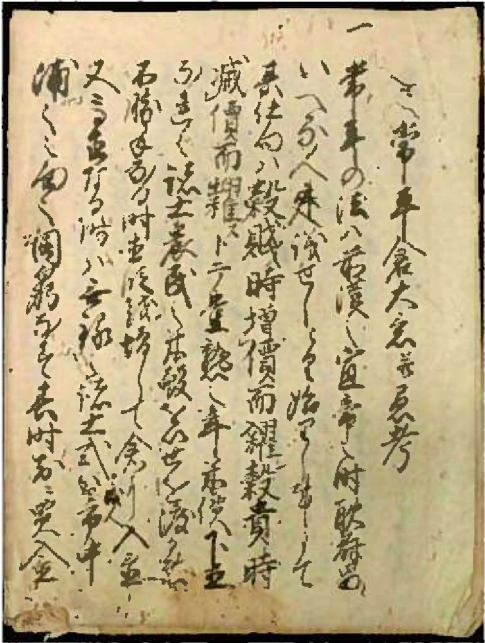


- 調所広郷は、弘化4年(1847年)に給地高改正<sup>きゅうちだか</sup>を実施した。その背景には、困窮した武士の中に藩が与えた土地を勝手に売却し、有事の際に本来負担する軍役<sup>ぐんやく</sup>を果たせない者が多数に上っていたことがあった。そのため、土地を買った者から元の所有者へ売却させ、買い戻せない者は実態に即して石高を引き下げた。この給地高改正で、特に第一線で戦う下級武士の石高が実際と一致し、軍役への即時対応が可能になった。給地高改正は明治初期まで数度にわたって行われ、薩摩藩の軍事力を支える基盤にもなった。
- 島津斉彬は、集成館事業で薩摩藩の工業化を進めるとともに、藩内の安定のため農業政策も推進した。藩主就任後、まず常平倉<sup>じょうへいそう</sup>を設置した。これは、藩が一定量の米を確保し、米価高騰の際は放出するなど、米価の調整を行う制度であった。また、「農八国之根本」として、農政担当の役人への指示も行った。

農は国之根本に候間、百姓不及困窮、追々戸口相増候様掛之人々日夜心掛、末々迄行届、勸農之文字に相叶候様、可及吟味事、

『政化に関する論達書』『島津斉彬文書 下巻一』134号文書

【大意】  
農業は国の根本であり、百姓が困窮せず人口が増えるように農政担当者が日夜心掛け、地方の末端まで指導が行き届き、勸農の文字にふさわしいように、念を入れて調べること。



「常平倉考大意并愚考」(山崎郷御飯屋文書)<sup>2</sup>  
【さつま町宮之城歴史資料センター蔵】

- 薩摩藩の貨幣鑄造事業は島津斉彬に始まり、琉球の貨幣不足を理由に、安政2年(1855年)に幕府へ貨幣鑄造を請願した。幕府は、翌年不許可としたが、斉彬は市来四郎らに貨幣鑄造の準備を命じ、安政4年に幕府が鑄造していた天保通宝の密造を始めた。斉彬の急死により鑄造事業は一時中断するが、文久2年(1862年)に島津久光は、幕府から琉球通宝鑄造の許可を得た。琉球通宝は、幕府が鑄造していた天保通宝とほぼ同じ質量だったので、これを基に薩摩藩は翌年から本格的に天保通宝を鑄造し、さらに、二分金の鑄造や、藩札の発行も行った。この薩摩藩の匱金や藩札は、外国から軍艦や銃砲を購入するなど多額の出費を強いられていた藩財政の一助となった。<sup>3</sup>

1 『鹿児島県史料 島津斉彬公史料 第一巻』にも収載(455号文書)  
2 江戸時代から明治初期にかけて山崎郷地頭飯屋及び山崎村役場における日誌などの公文書。鹿児島県指定文化財。  
3 『偽金づくりと明治維新』徳永和喜(西郷南洲顕彰館長)

● アメリカ南北戦争(1861年～1865年)の勃発により、綿花の一大産地であったアメリカ南部からヨーロッパへの綿花輸出が途絶し、世界的に綿花の価格が高騰した。その情報入手した薩摩藩は、大和国(現在の奈良県)などの綿花を大量に買い付け、これを長崎経由で上海の外国商社に売却して多額の利益を上げた。五代友厚は、この利益でイギリスへの留学生の派遣費用も捻出できると考え、藩に留学生派遣を提言している。

このように、幕末の薩摩藩の財政を支えたのは、調所ずしよの改革で強化された黒糖などの専売制のほか、海外交易による利益もあった。<sup>1</sup>

● 西南日本における、庶民に対する武士の比率の高さは、庶民の不平や政治への参画の抑制にも有効であった。このことは、特に薩摩において顕著であった<sup>\*</sup>。この伝統的な権力構造は、藩経済を梃入れし、支配体制のために財源を捻出し、軍の改革を速めるための効果的な基盤となった。幕府の天保の改革は失敗したが、薩摩や長州の天保の財政改革は、後に起こる争いで両藩をより強い立場に置くことにつながった。<sup>2</sup>

<sup>\*</sup> 「鹿児島県禄高調」(明治4年、1871年実施)によると、薩摩藩では、士族の割合が26%に達しており、4人に1人は武士であった。全国平均の5～6%と比べると非常に高い。<sup>3</sup>

1 「世界綿花飢饉と幕末薩摩藩—討幕の資金調達と武器購入—」(『鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集 第40号』)原口泉(鹿児島県立図書館長)

2 『The Emergence of Meiji Japan』マリウス・ジャンセン(プリンストン大学名誉教授)編

3 『鹿児島県の歴史』原口虎雄(鹿児島大学名誉教授)

## 5 家老等の役割

幕末期の薩摩藩には、島津久光の下に小松<sup>たてわき</sup>帯刀、岩下<sup>みちひら</sup>方平、新納<sup>にいろう</sup>久脩、桂<sup>ひさのぶ</sup>久武、喜入<sup>きいれ</sup>久高、町田久成など優秀な家老クラスの上級武士がおり、開成所設置、薩摩藩英国留学生派遣、パリ万博出展などの諸政策の実施においても、久光と彼らとの間で情報や価値観の共有がなされていた。それにより初めて、西郷隆盛や大久保利通などの活躍が可能となった。

- ◎ 上級武士の小松、桂、岩下らの援助の下、政治的なバランス感覚があった大久保が、西郷と協力して政治をリードした、というのが幕末薩摩藩の構図である。<sup>1</sup>
- ◎ 小松帯刀は、城代家老（藩主代理）として徳川慶喜をはじめとする幕府の要職との折衝に当たった。薩長同盟締結も、小松が列席したからこそ可能であった。また、近衛忠房から島津久光と第12代藩主 島津忠義父子に宛てた書状から、近衛家（朝廷）も小松を厚く信頼していたことが読み取れる。



小松帯刀(1835-1870)【尚古集成館蔵】

(元治元年)

別紙ニ申入候、呉々帯刀帰国之儀ハ困り入候、近頃ニテハ一橋ヨリ帯刀を厚依頼之様子ニテ、彼是相談等も在之候事ニ候ヘハ、旁帯刀在京ニ候ヘハ、惣体之都合ニも宜敷、旁是非急速登京御申付、分テ御頼申入候事、(中略)

大隅守殿

修理大夫殿

【近衛忠房書状】<sup>2</sup>【玉里島津家資料・黎明館蔵】

【大意】

(元治元年、1864年)

別紙で申し入れる。かえすがえす(小松)帯刀を帰国させることは困り入ることである。近頃では(朝廷では)、一橋(慶喜)よりも(小松)帯刀を厚く信頼する様子で、色々と相談等もあるので、何かと(小松)帯刀が京都にいと、全ての都合がよい。是非(小松へ)急ぎ上京を命じるよう、特に依頼申し入れる。(中略)

大隅守(島津久光)殿

修理大夫(島津忠義)殿

1 宮地正人(東京大学名誉教授)

2 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』に収載(1261号文書)



- 久光と下級武士を中心とする誠忠組との間を取り持ったのは、久光の信頼を得た大久保利通に加え、誠忠組の中で最も家格の高い岩下方平<sup>みちひら</sup>であった。

誠忠組の実質的なリーダーは大久保であったが、岩下が総裁のような役回りをしていたと言われる。大久保が家格が低い下級武士であったのに対して、岩下は同志の中では最も家格が高く、後には家老になる人物である。学も人望もあり、組織のまとめ役として適任だった。<sup>1</sup>



岩下方平(1827-1900)【黎明館蔵】

- 明治維新への貢献度の目安でもある政府からの賞典禄は、最高が西郷隆盛の2000石(戊辰戦争に対して)で、大久保利通・木戸孝允の1800石(王政復古に対して)、そして小松帯刀<sup>たてわき</sup>・岩下方平の1000石(王政復古に対して)が続いた。小松や岩下は、維新の三傑(西郷・大久保・木戸)に準ずる評価を受けていた。

- 新納久脩<sup>にいろう ひさのぶ</sup>は、軍役方総頭取として軍制改革を行い、西洋式軍制を導入した。文久2年(1862年)に軍役奉行となり、翌年の薩英戦争では、その成果が実証された。

慶応元年(1865年)、新納は大目付に昇進し、薩摩藩英国留学生を率いてイギリスに渡航した。五代友厚とともに軍艦や紡績機械の購入に奔走し、また、ベルギーに渡りモンブラン伯爵との間でベルギー商社設立やパリ万博への出展の交渉を行った。帰国後は、家老に昇進し、藩の中樞を担った。



新納久脩(1832-1889)【黎明館蔵】

- 鹿籠<sup>かご</sup>(現在の枕崎市)領主の喜入久高<sup>きいれ</sup>は、島津久光の率兵上京に慎重な態度を取る保守的な島津久徴<sup>ひさなが</sup>に代わって首席家老に抜擢された。側役<sup>そばやく</sup>小松帯刀<sup>こなん</sup>、小納戸<sup>と</sup>中山中左衛門がこれを補佐し、誠忠組の大久保利通などを取り込み、政局に臨んだ。

喜入は、琉球掛<sup>かかり</sup>、御軍役掛<sup>いせいほう</sup>、鑄製方掛、唐物取締掛、造士館掛など重職を兼務した。生麦事件後、江戸藩邸において、藩主の代理として幕府との連絡や交渉に当たった。

その後、戊辰戦争にも出陣し、明治2年(1869年)の藩政改革においては、島津家の家政を司る内務局家知事(知家事)となった。<sup>2</sup>

「喜入家十七代大概之譜・十八代履歴荒増」：資料5 (P.138)

1 『幕末政治と薩摩藩』佐々木克(京大名誉教授)

2 「喜入家十七代大概之譜・十八代履歴荒増」【枕崎市文化資料センター南溟館蔵】



<喜入久高の役職 文久元年(1861年)>

御流儀砲術掛，琉球掛，御軍役掛，琉球産物掛，鑄製方掛，唐物取締掛，御改革方掛，御内用方掛，御製薬方掛，犬追物掛，御勝手方掛，演武館掛，造士館掛，佐土原掛，天祐丸掛，御軍役惣奉行，

(「喜入家十七代大概之譜・十八代履曆荒増」より)

(参考)

御流儀砲術:長崎の高島秋帆しゅうはんが始めた西洋式砲術

鑄製方:大砲や銃を鑄造する部署

御内用方:藩主の支出を管理する部署

御勝手方:藩財政を所管する部署

天祐丸:万延元年(1860年)，イギリスから購入した蒸気船

- 慶応元年(1865年)9月に家老に就任した桂久武は、12月には上京し、翌年正月の薩長同盟締結の重要な場面に立ち会った。慶応3年10月に討幕の密勅が降下された際は、出兵に慎重な立場を取る門閥保守派に対し、西郷・大久保らの主張する島津忠義の率兵上京を強力に支持し、一挙に藩論を出兵に導いた。

明治2年(1869年)の藩政改革後は、参政(翌年、大参事)として西郷とともに藩政を担った。明治4年には、都城県の参事に就任した。西郷との親交が深く、西南戦争にも参戦して城山で戦死した。<sup>1</sup>



桂久武(1830-1877)【個人蔵】

1 「解題」(『鹿児島県史料集(26) 桂久武日記』)村野守治

## 6 郷士の役割

薩摩藩は、他藩に比べ圧倒的に武士が多く、特に郷士が多かったことが特徴である。幕末に数回にわたって実施された軍制改革、給地高改正きゅうちだかなどを通じて、郷士が有事に対応できる体制にあったことが、明治維新において大きな力となって現れた。

- 薩摩藩の特徴は、際立った武士人口の多さである。修史局編『明治史要附表』に掲載されている明治7年(1874年)の戸口調査に基づく一覧表によると、全国人口3362万人のうち、士族は188万3265人、戸数40万6209戸で、全国人口の5.6%に当たる。このうち20万4149人が鹿児島県士族だった。また、宮崎県諸県地方にも、都城島津氏むろかたの旧家臣を含め7000人近くの旧薩摩藩士族が存在した。全国の士族のうち、10人に1人は鹿児島県士族で、県内においては、人口の4分の1が士族だったということになる。<sup>1</sup>

### 【幕末】

- 琉球への外国船来航事件の対応として調所広郷ずしよひろさとが行った軍制改革(各家の石高に応じて兵役や武器の準備を行う改革)の結果、薩摩藩は軍役動員がしやすくなった。多くの藩は、いざ戦いという時に軍役動員ができない状況にあり、長州藩などは武士以外の者も含めた「奇兵隊」を創設し軍事力を確保しなければならなかった。

各郷、盛んに鉄砲隊の訓練を行い、数郷合同で訓練をすることもある。

国境の出水郷いずみ(現在の出水市)や高岡郷(現在の宮崎市高岡町)などの郷士の家は生垣が囲み、門は柱が二本立つだけで扉がある家は少ない。衣服も家も質素で華美なところはなく、特に衣服はみすぼらしい者が多い。

郷士は土地を所有している。多い者は200石ぐらいだが、逆に生活に困り土地を切り売りして小作をする者もあり、貧富の差が非常に大きい。

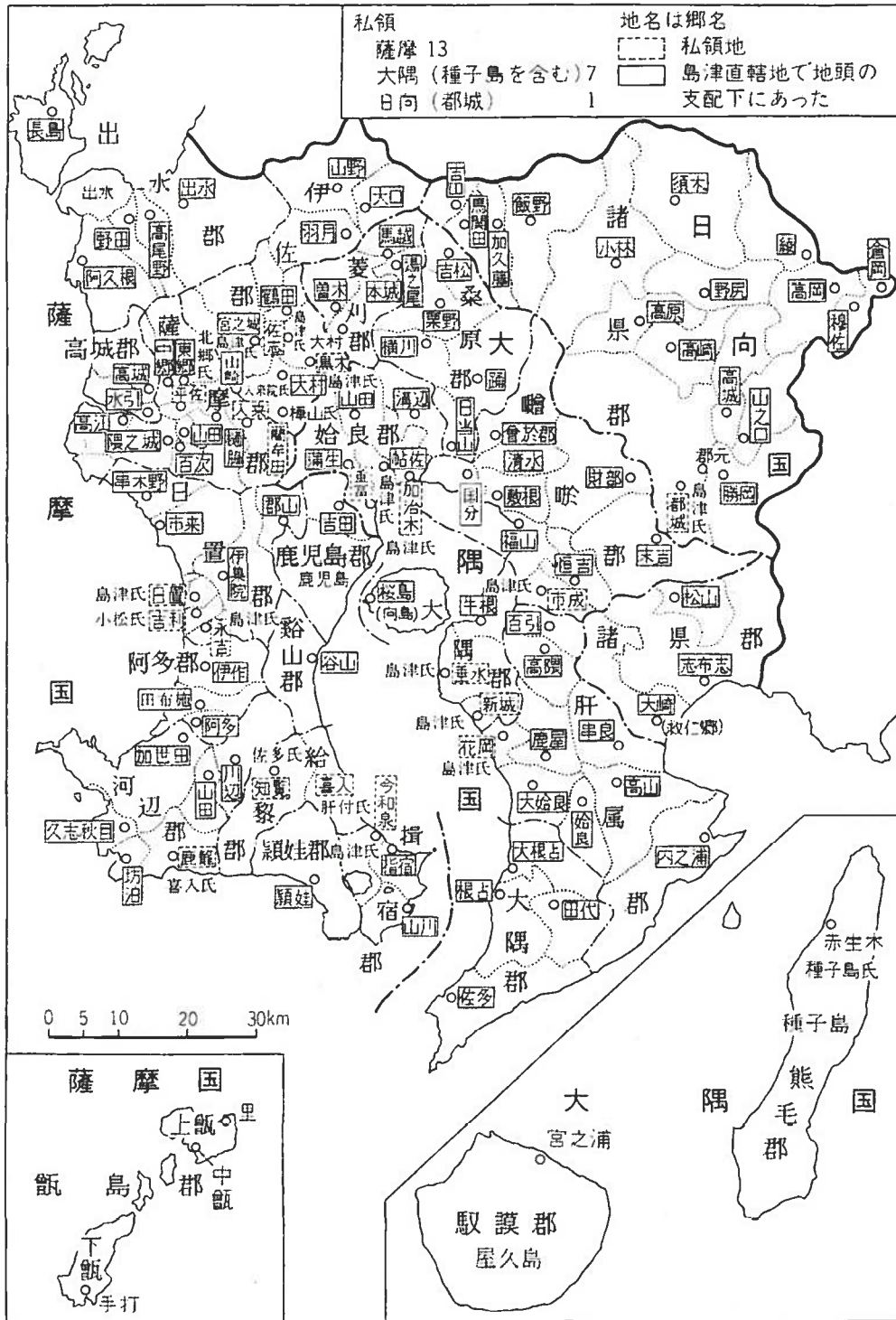
郷士は日常から坂道を上り下りし、田畑の耕作をして体を鍛えているので、丈夫で朴実質素である。

『観光集』秋月悌次郎<sup>2</sup>【鹿児島県立図書館蔵】

1 『西郷隆盛と士族』落合弘樹(明治大学教授)

2 万延元年(1860年)に薩摩藩を訪れた会津藩士

<江戸時代の郡郷>



出典：『鹿児島県の歴史』原口虎雄

- 薩摩藩では、刀槍の技量のみならず鉄砲の火力を重視しており、他藩と異なって士分も射撃の訓練を行っていた。薩摩藩士は、武家人口という量において他藩を圧倒していたのみならず、質においても戦国以来の実践能力を太平の世でも温存していたのである。<sup>1</sup>

1 『西郷隆盛と士族』落合弘樹(明治大学教授)

- 伊作郷（現在の<sup>いざく</sup>日置市<sup>ひおき</sup>吹上町伊作）の郷土であった<sup>うと</sup>宇都良之介の回顧によると、元治2年（慶応元年、1865年）の伊作郷では、役がない下級の郷土でも、能力があれば登用して協議に参加できるように郷内の仕組みを刷新している。また、弓術よりも砲術の方が重要だと考えられたために、それまで弓で行っていた行事を小銃で行うように変化した。

一 元治二年二月

伊作重組頭申付候

地頭

- 一 当時藩政伊作郷ニ組頭六名ヲ置レ五百七十余ノ士ヲ指揮主宰スルノ職掌タリ、茲ニ初テ本職ニ名ヲ置キ、専ラ士気振起ノ方針ヲ旨トセラル、故ニ拜命ノ翌日六名ノ同僚ニ壮年士輩ヲ化導誘掖スルニ大義名分ノ存スル処ヲ以テセサル可ラサルヲ論ス、痛議数時間ニ涉リ、遂ニ尊王ノ説一定シ、郷内拏テ佐幕ノ説全ク跡ヲ断ツカ如クニ至レリ、今ニシテ当時ノ往日ヲ回顧スレハ悲憤交々至リ、転タ感慨ノ念莫キニシモ非ラス、又タ役員カ非役ノ士対スル待遇ヲモ刷新シタリ、其要ハ郷内名望ノ士ヲ選ミ、諸般ノ協議ヲ為サシメ<sup>現今ノ村会議員ニ類似ス</sup>、務メテ輿論ヲ重シ物議ヲ生スルノ弊風ヲ避ケ遠クルニ至レリ、且ツ弓術鎗術ノ必要ナラサルヲ感シ、劍術・柔術・砲術ノ時勢最モ専ラニスヘキヲ論シ、毎歳例式藩主及ヒ郷内武運長久ノ祈禱ノ加キモ、旧式ノ弓術ヲ小銃射的ニ換ルコトト為シタリ、

【宇都良之介履歴書】<sup>1</sup>【日置市吹上歴史民俗資料館蔵】

【大意】

一 元治2年（1865年）2月

（地頭から）伊作郷の重（<sup>かさみ</sup>定員外の意味）組頭に命じられる

- 一 当時の藩政では、伊作郷には組頭を6人配置しており、570人余りの郷土を指揮する職掌だった。この時に初めて本職（組頭職）になった。郷内の士気を上げよとの方針があったため、拜命した翌日から同僚6人で郷内の士族達を導くための大義名分を話し合った。数時間の議論の末、尊王の考えで郷内を一致させ、佐幕（幕府に味方すること）の考えをなくした。今（明治40年時点）にして当時のことを回顧すると、悲しみや憤りなどが混じって感慨の念がなかったわけではない。また、非役の郷土に対する待遇も刷新した。その概要は、今の村会議員のよう  
に、郷内の名望ある郷土を選んで協議させ、世論を重んじて、物議が生じるような弊風（悪い習慣）を避け、遠ざけるようにした。かつ、弓術・鎗術がもう必要ないと考え、劍術・柔術・砲術を中心に行うことを論じたため、毎年の儀式である藩主と郷内の武運長久の祈願であっても、旧来の弓を射るものから小銃の射的に替えた。

1 伊作の郷土であった宇都良之介が明治40年（1907年）5月に自身の履歴を記したものの。



- 幕末期には、郷士は頻繁に鉄砲を含む軍事教練を行った。『守屋舎人日帳』<sup>1</sup>によると、高山郷（現在の肝付町の一部）では、慶応2年（1866年）に調練稽古を15回、翌年には10回行っており、一般の郷士の日記にも鉄砲稽古の記事がある。また、伊作郷などでは、郷士が集まり鉄砲会と呼ばれる射撃の競技会がしばしば開かれており、加治木島津家の家老であった新納仲左衛門の日記にも、嘉永3年（1850年）4月17日に加治木（現在の始良市加治木町）と国分（現在の霧島市国分）の郷士対抗で鉄砲会が行われたとの記述がある。このような日々の訓練が、戊辰戦争の際の薩摩藩兵の活躍を支えた。

卯正月六日 晴天

- 一 今日五ツ過、宇都宮連正院殿所へ御用ニ付差越候、四ツ時分吟味場ニ鉄砲之稽古始メニ差越候、和田家、種子嶋家打込ニテ人数式拾人ニテ、御地頭様御出、九ツ時分帰る、御仮屋へ差越候、直ニ帰る、

【守屋納一郎日記】<sup>2</sup>【守屋泰造氏蔵、黎明館保管】

【大意】

卯（慶応3年、1867年）1月6日

- 一 今日五ツ（午前8時）過ぎ、宇都宮連正院殿の所へ御用で出かけた。四ツ時分（午前10時頃）、吟味場での（今年の）鉄砲の稽古始めに出かけた。和田家、種子島家が合同で、人数は20人で地頭様がお出でになった。九ツ時分（正午頃）帰った。仮屋へ出かけて、すぐに帰った。

【守屋納一郎日記】：資料6（P.139）

- 慶応2年（1866年）に京都守備に当たっていた伊作郷士 篠原政正<sup>まさただ</sup>の日記には、ミニエー銃（前込の西洋式歩兵用小銃）を使うことになり、訓練を始めた記述がある。その一方で、薩摩の武士にとって京都駐留は、芝居見物や舞妓の舞を見るなど、京都の文化に触れる機会でもあった。

（慶応二年三月）廿二日雲

- 一 九ツ時分よりミニヘルハトロン作方、宿陣内にて作方有之、七ツ時分過迄作方いたし、夫より外出なし、

同廿三日同

- 一 今日四ツ時分より、物主所へ炮術相替り候付手續稽古として皆々、手續稽古いたし、九ツ過に帰り、夫より外出なし、  
（中略）

三月廿八日雨

- 一 今日四ツ過、南御門外出いたし、今手川通り石薬師通り寺町に出候、三条小橋より木屋町通り、先斗町に出下り、四条橋■渡り、四条通り之芝居に差越見物いたし、夫より四条通りに出、縄手通より富永町通り新橋渡り尾張屋差越語り、夫より又々芝居所に差越見物いたし、（以下略）

【篠原政正日記】【日置市吹上歴史民俗資料館蔵】

1 高山郷の上級郷士で、郷士年寄（郷の責任者）を務めた守屋家の日誌。秀村選三（九州大学名誉教授）校註。  
2 高山郷士 守屋納一郎（『守屋舎人日帳』の守屋家の親戚に当たる）の日記。

【大意】

(慶応2年, 1866年3月)22日曇

- 一 九ツ時分(正午頃)からミニヘル銃のハترون(弾や火薬を包む油紙)を作る作業をした。七ツ時分(午後4時)過ぎまで作業をして、その後は外出なし。

同23日同じ

- 一 今日四ツ時分(午前10時)から、指揮所で鉄砲が変わったため操作の訓練として皆で操作の訓練をして、九ツ(正午頃)過ぎに帰った。その後は外出なし。

(中略)

3月28日雨

- 一 今日四ツ(午前10時)過ぎ、南御門から出かけ、今出川通り、石薬師通りから寺町通りに出た。三条小橋から木屋町通り、先斗町に出て下り、四条橋を渡って四条通りの芝居を見物し、それから四条通りに出て、縄手通りから富永町通り、新橋を渡って尾張屋へ出向いて話をして、それから又々芝居所に出かけて見物した。

「英中隊運動図」：資料7 (P.140)

- 戊辰戦争に当たっては、藩はたびたび各郷に軍資金を割り当てた。各郷の郷士はこれに応じたが、過大な要求に対し減額を求める場合もあった。

辰二月廿七日 曇晴天

(前略)

手扣

金子貳拾両

右は此節御貸上金之儀に付、御張紙を以細々被仰渡趣委細奉畏候て精々才覚仕申候得共、いまた調達相叶不申候、私事も二男仕付等折角仕申候得はいまた成就にも相成不申候、然は少々之持高等も内々は配分□居申候、尤三、四ヶ年以前迄は俵四、五拾俵位ツ、売米等有之、右を以渡世仕居申候処、当年は俵拾俵位乍漸売米御座候、左候得は外に渡世仕候手便全無御座候に付、先年とは相替り何様可仕哉と心痛仕居申候折柄、先達て御貸上仕候金子もいまた内々は返金之手便も相叶不申候処、猶又此節之儀承知仕奉畏候、此節之儀に付ては誠に奉恐入次第御座候に付、右本行之員数丈は是非調達仕、御貸上仕可申候間、不足金之儀は何卒御憐愍を以御免許被仰付被下候様被仰上被下度成合候様、偏に奉願候、以上、

辰二月廿八日

守屋舎人

【守屋舎人日帳 第十卷】

【大意】

辰(慶応4年, 1868年)2月27日 曇りのち晴天

(前略)

てびかえ  
手控

金20両

右は今回の藩への貸上金のことについて、張り紙で細々と言い渡された内容は恐れ多いことで、できるだけ工面してみたけれども、未だに準備できたと申し上げられません。私も二男がいて努力して参りましたが、未だ成功したとは言えません。そのため少しの持高等も内々に(二男に)配分しています。3～4年前までは米を4～50俵位ずつ売って生活していましたが、今年は10俵位ようやく売れたところです。そのため、ほかに生活する方法が全く無いため、前年とは変わってどうやって生活していこうかと本当に悩んでいるその時に、先立って(藩に)貸し上げたお金もいまだ返金も実現しないところに、なおまた今回のことを承知することは心配です。今回のことは誠に恐れ入りますが、右の本来の数だけは調達して(藩に)貸し上げますが、不足分につきましてはどうか憐れみを以て許してくださいませようどうぞお願い申し上げます。以上。

辰2月28日

守屋舎人

- ◎ 郷士の中には、軍記物などの書物を借りて読み、武士としての知識を身に付ける者もいた。また、こうした需要に応えるため、貸本を副業とする郷士も存在した。

戌九月十三日

一 大崎上床筑兵衛・小野喜惣次今日帰国に付、今朝四ツ時分壺剋行候、(申略)八ツ時鹿屋伊地知喜兵衛被参候、其折書物かし本式拾五冊之内五冊加入置候、

一 大久保武蔵鎧式拾五冊 かり賃百式拾四文追テ払筈 九月廿三日払

戌九月廿三日

豊臣鎮西軍記拾五冊 かり本代百七拾式文追テ払筈 十月廿三日払

『守屋舎人日帳 第九巻』

【大意】

戌(文久2年, 1862年)9月13日

一 大崎の上床筑兵衛・小野喜惣次が今日帰国するので、今朝四ツ時(午前10時頃)にしばらく同行した。八ツ時(午後2時頃)に鹿屋の伊地知喜兵衛が来て、その時に貸本25冊のうち5冊を加えていった。

一 『大久保武蔵鎧』(江戸初期の旗本である大久保彦左衛門を描いた小説)25冊 借り本代は124文 後日支払予定 9月23日支払

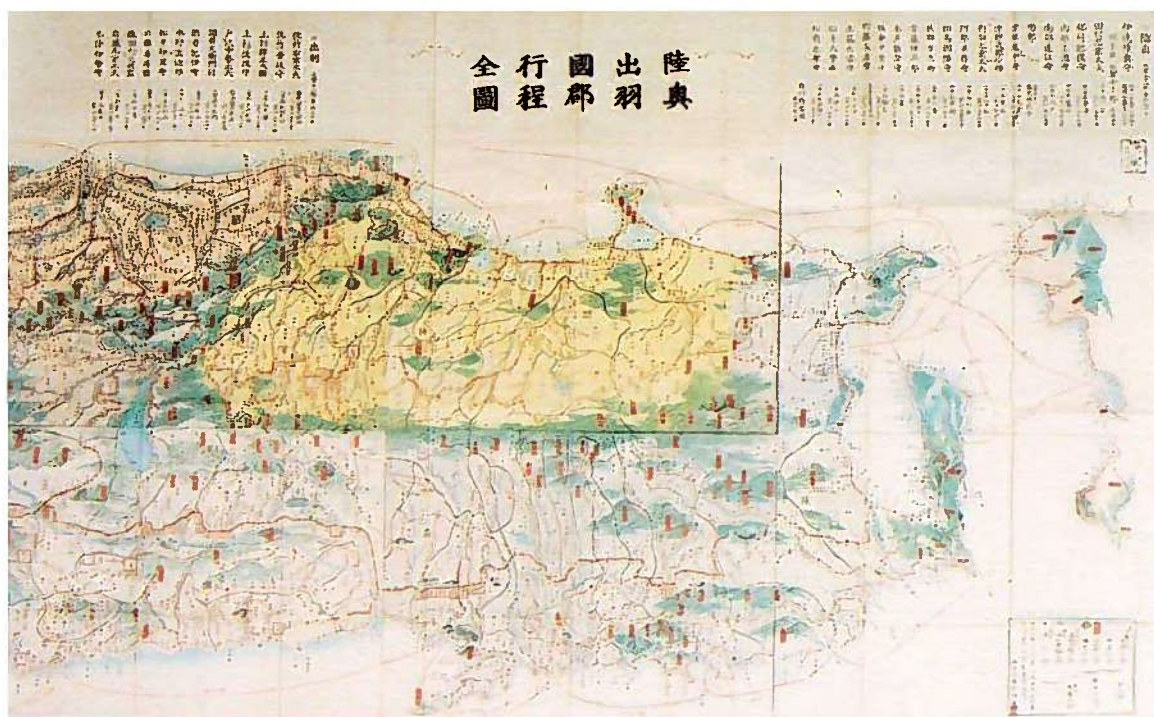
戌9月23日

『豊臣鎮西軍記』(戦国時代末期の島津氏の九州制覇及び豊臣秀吉の九州出兵を描いた軍記物)15冊 借り本代は172文 後日支払予定 10月23日支払

## 【明治初期】

- 戊辰戦争(1868年～1869年)において、薩摩藩の軍事力を支えたのは郷士であった。出水郷士は、鳥羽伏見の戦いから奥州平定にかけて活躍した。特に、伊藤祐徳は山陰道鎮撫に当たり、西園寺公望総督の参謀に任じられ、重要な役割を果たした。

「伊藤祐徳日記」：資料8 (P.141)



「陸奥出羽国郡行程全図」【個人蔵、黎明館保管】

戊辰戦争において、本営から各部隊に作戦用に配布された地図で、「薩本営」の黒印が押してある。

- 明治2年(1869年)の版籍奉還に当たり、私領は藩直轄とされ、私領主の家臣(陪臣、又家来)は外城士と同格とされ、呼び名は城下士も合わせて士族となった。外城の士族は持高を100石に制限されたが、同年10月には50石を上限とされ、過分な高を所有する者は郷内で売却するように命じられた。
- 鹿児島城下士は、生活に必要な収入を藩や政府から支給される秩禄(給料)に頼っていたため、秩禄処分<sup>\*</sup>による経済的な影響が大きく、その不満も西南戦争の背景となった。それに対し、郷士は自らの開墾地を持っており、そこから得られる収入もあったため、鹿児島城下士に比べれば秩禄処分による経済的な影響は少なかった。

<sup>\*</sup> 成立当初の明治政府は、華・士族に家禄を、維新の功績者などに賞典録を支給していた。これらを合わせて秩禄と呼び、政府歳出の約30%を占めていたとされる。政府は、財政強化のため秩禄の廃止を企図し、明治9年(1876年)に華・士族へ金禄公債を交付した。これにより華・士族は、5%程度の公債の利子のみで生活することになり、生活に困窮する者が多く出た。



## 【西南戦争】

- 戊辰戦争を武士の力で乗り切ったということもあり、西郷隆盛は武士を切り捨てることができなかつた。西郷がイニシアティブを取って西南戦争を起こしたわけではないが、自分が面倒を見てきた人間が制御できなくなった時に、自分がどのような対応を取るべきかを考え、黙ってついて行つたと考えられる。<sup>1</sup>
- 西南戦争に従軍した郷士の中には、戦争の目的を理解しないまま出陣した者もいた。そこには、西郷隆盛に対する敬愛の念からのほかに、地域の指導者や私学校幹部による強制的な徴用も存在した。
- 旧藩主 島津家とともに都城島津家も戦火を避けて桜島に避難すると、元家臣だった人々も主君を守るため桜島に渡つた。そこには、私学校軍に参加を強制されたが拒否した人々も加わつた。なお、同じように県内の士族で島津家の人々を守るため、1100人以上の士族が桜島に集まっていた。

(明治十年)六月三日(中略)

曾我雅枝

- 一 (前略)追々私学党甚敷不忍傍観機会ニ相成、三月下旬名簿加入志願申出置候、
- 一 兼テ医業イタシ候者ニ付肥後表、都城兵隊手負ノ者トモ迎トシテ差越候様戸長ヨリ申付候ト雖所存有之、病身ノ名ヲ以辞シ居候処、(中略)検査医等差越格別ノ病体ニ無之旨ヲ以押シテノ申付ニテ不得止出兵仕候、(中略)
- 一 五月三日足痛相発シ病院エ入居其内都合イタシ病院鑑札ヲ得五月廿日帰郷仕候、  
右ノ通ニ有之候処一時脅迫ニ応シ深恐入候得共、(中略)イツレ帰順仕度所存ニテ本日当地迄差越申候、

六月八日(中略)

鹿児島並諸郷御守衛人員略左ノ通

- 一 重富百二十五人      一 都城九十七人
  - 一 伊作三十一人      一 桜島百六十五人
- (中略)  
惣計千百六十六人

〔桜島日記〕<sup>2</sup>【都城島津邸蔵】

【大意】

(明治10年、1877年)6月3日(中略)

曾我雅枝

1 宮地正人(東京大学名誉教授)

2 『明治に於ける都城島津家日誌 第一巻』川越明編。桜島に避難していた都城島津家の家臣による日誌。

- 一 (前略)その後、私学校党がひどく傍観ができない状況になったので、三月下旬(桜島へ行く)名簿に入りたいと申し出ていた。
- 一 日頃医療に当たっていたので、(私学校軍に参加していた)肥後の都城兵の負傷者を迎えに来るよう戸長から言われたが、(桜島へ行く)志があったので病気と言って断っていたところ、(中略)検査医らが出向いて特に病人では無いと診断して強制したのでやむを得ず従軍した。
- 一 5月3日に足の痛みで入院し、その後、病院の診断書を得て5月20日に都城に戻った。  
右のとおりで、一時脅迫に応じて深く反省しており(中略)いずれ帰順する気持ちであったので本日桜島に出向いた。

6月8日(中略)

鹿児島及び諸郷から(桜島)守備の人員の概略は次のとおり

- 一 重富(現在の始良市あいらの一部)125人
  - 一 都城(現在の宮崎県都城)  
市)97人
  - 一 伊作31人
  - 一 桜島165人
- (中略)  
総計1,166人

- 明治以降、伊作郷いざくの学校において漢学の講読などを行っていた元伊作郷士の宇都良之介は、西南戦争に従軍したが、明治40年(1907年)に記した回顧録(履歴)では「西郷隆盛ニ随行、暴挙ニ党与シ」と記述している。

<西南戦争における両軍の兵力等比較<sup>1</sup>>

- ◆ 西郷軍の兵力 総計30,000人余(戦死者:6,200人余)
  - うち、私学校を中心とする自主的な出陣 約13,000人
  - 田原坂の戦い以後に補充された者 約10,000人
  - 九州各地より参戦した“党薩隊” 10,000人弱
- ◆ 官軍の兵力 総計60,000人弱(戦死者:7,000人弱)

<城下士と郷士の戦死者比較<sup>2</sup>>

西郷軍の戦死者合計(旧薩摩藩領)	5,373人
うち、鹿児島城下士	1,569人
郷士	3,804人

「西南戦争密偵報告」:資料9(P.142)

1 『鹿児島県史 第3巻』  
2 『薩南血涙史』加治木常樹